

# 運命の定めを壊す少女

ヴラド・スカーレット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼女は無の存在だった…彼女は別次元に飛ばされた…彼女は人と関わり心を知る…

彼女は失うことを知った…彼女は世界を滅ぼそうとした…彼女は眠りについた…

これは眠りについた彼女が記憶を持ったまま転生し、人としての生活をしながら成長していく

物語である…ちなみに敵は悲惨な運命になることが多々あります。

## 目次

番外く次元試行のナイアルラトホテプく

噛み合った運命の歯車 前編

噛み合った運命の歯車 後編

監視者は忙しい

異界からの帰還

世戒、英国へ：

地下施設のドラゴンウォリアーズ

次元巡りし我らの領域

次元巡りし二創龍の咆哮

お忍び視察はトラブル注意？前編

お忍び視察はトラブル注意？後編

序章く平穏を好む災厄の神く

プロローグ

転生に選ばれたものたち：

うちの子達の成長日記

猫を狩る蝙蝠が触れた龍の逆鱗

友を守るために放たれる零閃

悪魔と墮天使と龍の異種族協定総会

愚者は生け贄となる、覇邪神龍帝 再臨

激震!!赤き龍の帝王!!!

第零章く平穏日常のイレギュラーく

うちの子達の成長日記ver.2

チョコの甘さは幸せの味

踏み台狩りし道化師

84 80 75 70 65 60 56 51 49 47 44 39 37 33 28 18 16 13 11 6 1

全てを奪われ失った異形の復讐者

88

出会いはいつもハプニング!?

90

屋敷に住まう不思議な住人

92

友達

97

# 番外く次元試行のナイアルラトホテプく 噛み合った運命の歯車 前編

ヴラド side

世戒を英国に行かせ後輩達に試作ベルトを渡した後：私はやることのなくなつて居た：ティーオも帰ってきて丁度良かったのであることを思い付いた。

「おーい、ティーオ」

「うん？何：：って、何か思い付いたような顔をしてるね：」

あ、なんか引かれてるけど気にしない！！

とりあえず今からの事を説明しなきゃね！！

「まあね？とりあえずティーオ、今からの異界へ行くよ！！」

「どうしてそうなったの：」

「え？単純に：」

「単純に？」

まあ、思い付いた理由が理由だけに言いづらいいけどね：

「えつと：やつと完成したオリジナルドライバの最終運用相手が居ないから行こうかな：：てね？」

「あくなるほど：」

あ、よかつた：：どうやら大丈夫みたい「さて、最終運用はいいけど：一発逝つておこうか？」……

「え？」

そう言つてティーオはその姿を紅く雄々しい姿へと変え、その周りに紅い雷電が迸り始めた

「バスターマシーン秘伝奥義：」

「イヤイヤイヤイヤ!?それは駄目!!室内で使うような技じゃないよ!? MATTE!! MATTE!!」

「だが 断る」

「：：デスヨネー(？▽？：)」

そう言つてティーオは高く飛び上がり炎を纏いながら今、必殺の一

撃!!

「イナズマアアア!!キイイイイックウ!!」

「(、0言0、\*)くヴェアアアアアア!!」

私の腹に突き刺さるは地球帝国宇宙軍太陽系直掩部隊直属・第六世代型恒星間航行決戦兵器の必殺キック!!

…今更だけど物凄く長い肩書きだね♪

まあ、そんなことよりもそんなもののキックが刺さったことは…文字どおり”くの字”になってぶっ飛び何処かで聞いたことのある奇声を上げてしまいましたく(笑)

「と言うか…おおう…物凄く痛いイイ…」

「…何時もながら、よく痛いので済むね…一応オリジナルの一割に威力抑えたけど…それでも普通なら即死よ?」

「まあ…鍛えてますから」

「響鬼ネタ乙」

とまあ…いつも通りの茶番をして、ティーオが準備出来たので地下施設のワームホールルームへと向かった。

「それで?対戦相手は誰にするの?」

「うん?それは勿論…」

普段の私なら多分、こんな案を出さないだろうけど…たまにはヒールでも良いよね♪

「世界を守りし三人の仮面ライダーさ♪」

レ n s i d e

私達は現在、複数のはぐれ悪魔を搜索しているが…今日は私、睦月、一誠、スマイレ、ひなきの五人での搜索だ。

そして搜索中に大きな気配を感じた。

「睦月、一誠…」

「うん…今までに感じたことの無いモノだ…」

「ああ…けど、その近くにターゲットもいるみたいだから探す手間が省けたな」

確かに一誠の言う通りかもしれないが…

「一誠、もしかしたら罠の可能性もあるんだから突っ込んだら駄目だよ」

「いやヒナ、いくら俺でもそんなことはしねえよ!」

「だが、ひなきの言う通りだ、気をつけて向かおう」

そして私達は警戒しながらその場所へと向かった…

着いた先は廃工場だったが…そこには眼を疑う様な光景があった…

「「なツ!?!」」

「「え?」」

そこには紅い少女達がはぐれ悪魔達を”殲滅”していた…

テイスィオside

久しぶりの私視点ね?

さて、とりあえず簡単に現状説明…異界についた瞬間にはぐれらしき悪魔達に囲まれていた…以上よ。

え?なんでこんなに落ち着いてるのって?

この作品を読んでる方々ならわかるでしょ?

こんな…

「さて…それじゃ、雑魚共なんかさっさと殲滅すしよっか♪」

「面倒だけど…さっさと終わらせる」

『ああ?なめてんじゃねえぞ人間風情がアア!!』

どうやら勘違いしてるみたいね…まあ、どうであろうと…私達に敗北なし

「ふんツ!!」

とりあえず私は全身に力を込めて姿をバスターマシン7号に変身した。変身した理由はヴラド曰く変装の変わりよ。

「さて…それじゃ、さっさと行きますか」

そう言っつてヴラドはその姿を夕立改式へと変えた。

そして、変身完了と共に近くにいた下級悪魔を覇気で絶命させた。

『なツ!?!き、貴様らア…何者だ!!』

「私か?私はただの通りすがりっぽい?」

「私は名乗る必要ないわね…」

「さて…それではさつきと片付けるっぽい!!」

まあ、そこからは一方的だったから戦闘描写は省くとして、簡単に説明だけすると…

まず、相手の攻撃が弱すぎで避ける必要すら無い上、数だけでボスのヤツ以外はワンパンで沈んでいった…まあ、ボスもヴラドの拳一発KOだったけどね？

「呆気ないね…」

「まあ、ウォーミングアップくらいだからね…それに本命が来たからこいつらの後処理はお願いね？」

「はあ…わかったよ、とりあえず早く用を済ませてね」

「イエス!! マム」

そう返事をしてヴラドは彼らの元へと向かった。

…さて、コイツらは…黒炎で燃やしておこう…

ヴラド side

…うん、今回視点切り替えが多いね!! 次回は自重しよう!! (?▽?)

さて、そんな下らないことは置いて…まあ、警戒されるよね…すると、目の前のライダーらしき少年が声をかけてきた。

「貴様、何者だ」

「…さつきも同じこと言われたね…まあいいでしょう♪私はただの通りすがりっぽい?」

「…いやいやいや!! ただの通りすがりなわけないだろ!?! アンタ!!」

とても勢いのあるツツコミをいれてもらったのでもう少しふざけましようかね?

「あ…失礼、通りすがりの仮面ライダーでした」

そうやって私は左手に召喚した試作ドライバーを腰に装着した。

「あ、ああそうか…って、え!? か、仮面ライダー!?!」

「イエス!! アイ・アム!!」

「ニアブドウルか!!」



まあ、ちよつとふざけすぎたね…けど、最初にツッコミをいれてきた彼はどうやら転生者では無いね…まあ、もういいかな？

「さて、茶番はこれくらいにしておいて…」

そう言つて彼らに殺気を当てると一緒にいた女性陣を後ろに避難させて何時でも変身できるように臨戦態勢を取り始めた。

「…うん、実力は申し分無さそうだね」

「…何？」

そう言つて殺気を当てるのを止めて少し辺りを見渡した…流石に此処に留まり続けるメリツトもない…それ以上に闘いにくいね？

「ふう…流石にここじゃ闘いにくいしステージを変えようか？」

《ステージセレクト》

「な、なんだ…」

そう言つて右腰にあるスロットボタンを押すと、上から魔方陣が降りてきて、魔方陣が地面に着いたときには先程の廃工場とは違い、更地にいた。

「…なッ!?!」

すると私の後ろの空間が歪み、中からティーオがやって来た。

「いきなり別の場所に行かないでくれる？」

そう言いながら彼女は腰にアークルを出現させていた。

「ゴメンゴメン…さて…では、始めようか？」

そう言つて私は白いガシヤットを構え…起動させた。

《クラシックインベーター》

「ッ!!来るぞッ!!」

「…ああッ!!」

彼等も臨戦態勢を再びとつたね…なら、心置き無くやれるね!!

「さあ!!ゲームを始めようか!!」

そう言つた時の私の顔は…多分、笑っていた…眼に紅く稲妻を迸せながら。

## 噛み合った運命の歯車 後編

三人称side

ヴラドはガシャットを起動させると同時に腰にテクノヴァイザーを召喚したのを見て、レンは直ぐ様手にネクロム眼魂を持って起動させた。

《Stand by》

「いくぞッ!!」

そして掛け声を出して左腕に装着してるメガウルオーダーへと眼魂を装填した。

《Yes Sir》

待機音が流れる中、メガウルオーダーを回す様にして起こし、横にあるスイッチを押し込む。

《Loading》

そして、上部にあるユニットのボタンを押し、エネルギーの雫を本体に落とす。

「おうッ!!」

レンの掛け声に応じ、一誠はオルタリングを出現させ、睦月はレンゲルバックルを装着し、構えをとり…そして、言い放つ!!

「変身!!」

《Welsh Dragon Unison in AGITO!!》

《Turn up》

《TENGN!NECROM!MEG A UL ORDE!》

そしてレンは黒と翠のパーカーを纏い、睦月は紫光の壁を潜り、一誠は光に包まれてそれぞれ仮面ライダーネクロム、レンゲル、アギトへと変身した。

それを見ていたヴラドはとても笑顔でした。

「おお〜♪こんな風に仮面ライダーとの激突は始めてだから、あく心がピョンピョンするんじゃない〜♪」

「ふざけた事を言っただけで…行くよ」

「アイアイサー♪」

《スロット・イン》

ヴラドはティーオの一言に反応し、ガチャットをテクノヴァイザーへ装填すると…まるでメガウルオーダーの様な待機音がなり始め、レン達は驚いていた…

しかし、ヴラドそれを気にせずテクノヴァイザー上部の緑のボタンを押す。

《セット・アップ》

そしてティーオと同時に変身ポーズをとり…

「変身」

《ID：アライバル：インストール》

変身音声は鳴り響かせながら、深緑と漆黒の光により包まれる二人…そして光が収まるとそこには…ネクロムの様な姿のライダーと究極の闇を彷彿させる鎧と黒いドレスの様なものを着た黒目の少女が立っていた。

「なッ!?ネクロムだと!」

「いや、それにしても少し形状が違う…貴様ら、何者だ!!」

「うん?ああ…名乗り忘れてたね?」

そう言うヴラドは一回転してお辞儀をしたあとに話始めた。

「西へ東へ次元を漂う転生者狩り…私の今の名はアライバル…仮面ライダーアライバルと呼ぶといいよ?」

「私の事はクウガでいいよ…真名教える必要はまだ無さそうだし…」

「ッ!」

その二人の名乗りを聞いて驚愕したレンと睦月…

それもその筈、今ヴラドは自身のことを転生者狩りと言ったのだ。つまり奴の狙いは…と考え…故に、

「…なら、速攻で決めさせてもらおう!!」

するとレンはメガウルオーダーを起こして横のスイッチを押し込む。

『Destroy』

そして上部のボタンを押してエネルギーの雫を垂らして、必殺技を発動させる。

『DAITENGAN』

すると背後に眼を模した紋章が現れ、左拳に集中させていく。

「ハアッ!!」

そして飛び上がり、ヴラドへ向かって右足を突きだしながら飛んでいった。

《NECROM OMEGA ULOAD!!》

「ハアアア!!」

しかし…そんな攻撃に対して、ヴラドは冷静に見ながらテクノヴァイザーのA、Bボタンを同時に押し待機音を鳴り響かせた。

「ねえ、知ってるかい?速攻必殺技つてね…」

すると、ゆっくりと右拳を構え…左手でテクノヴァイザーのBボタンを押しした。

「負けフラグだよ?」

《クリティカルブレイク》

そしてレンの必殺キックとヴラドの必殺の拳がぶつかり合った…しかし、ヴラドの力が上であった為にレンは勢いよく吹き飛ばされた。

「グアッ!」

「二!レン!!/レンくん!!」

そして吹っ飛ばされたレンの元へひなき達が向かい、睦月はひなき達を庇うように立つ。

「クツ…ウオオオオ!!!」

《Form Change!!Blaze Meteor Dragon!!》

「そんな弾丸じゃ…当たらないよ」

一誠は左腰のボタンを押しミィティアフォームへとフォームチェンジし、牽制として二丁の銃を乱れ撃つが…全てティィオがクウガの力を使い、重力で叩き落としている。

「レンくん、大丈夫!」

「グツ…ああ、そこまでダメージは無い」

一方レンは然程ダメージを受けておらず直ぐに立ち上がった。

「おろ？もう少し寝てても良かったんだよ？」

「敵を目の前にゆっくり休めるか…さつきは少し冷静さに欠けていたが、こっからが本番だ」

そう言ってレンはカンガンキャッチャーを取り出し…同時にヴラドへと弾丸を放つが…

「おつ…と、いきなり撃つのは危ないよ？」

少し身体を反らしてなんなく弾丸を避けるヴラド。

「チツ…これも当たらないか…」

「まあ、あれくらいならまだ余裕だよ♪」

「そうか…なら」

そこで言ったん言葉を区切った瞬間にヴラドの懐へ潜り込み…

《NECROM OMEGA ULOAD!!》

《オメガファイニッシュ!!》

「これならどうだ？」

零距离で最大化力の砲撃をくらい後方へと大きく飛ばされたヴラド、吹き飛ばされた時にたちこもった煙により姿が見えない。

「砂煙でわからないがー「次に君は」やったか？」と言う」ーやったか？…なッ!？」

しかし…そこにはまるで何事もなかったかの様に悠々と煙の中からヴラドは歩いてきた。

「あれだけの攻撃を与えても無傷だと!？」

「確かに驚かさされたけど…まだ予想の範囲だったただだよ？さて…では、次でお仕舞いにー」

ヴラドの言葉に唾然としながらも再び構え直した瞬間、突然空間に亀裂が走り始めた。

「なんだ、これは…」

「あゝ…もう時間かゝ」

するとヴラドが突然奇妙な事は言ったのにレンが反応した。

「時間…だと？」

「そう時間…私がこの世界に”自己権限だけ”で止まれる時間さ」

どンドン空間に亀裂がはしる中、ヴラドは変身を解除して、レン達

の方へと向き直した。

「さて、それではこれにて”転生者への試練”を幕引きとさせて頂きます…」

「!?おいまで、試練でなんだ!!」

「君らは更に強くなるよ♪それじゃ、アディオース♪」

《ステージセレクト》

最後に聞いたその音声を最後に、レン達の記憶は途切れ…次に目が覚めたのは自分のベッドの上だった。

ティーオside

「良かったの、あれで」

私はさつきまでの事を気になって聞いてみた。

「まあ、不燃焼ではあるけど…下手にやり過ぎてもあれだし、あれくらのがまだ良いと思うよ?それに…」

「それに…って何?」

「フッフ…内緒さ♪」

何か思わせ振りの言い方をして、ヴラドはすぐに自分の研究室へと入っていった。

ヴラドside

「いや…楽しかった♪」

私はさつきまでの事を思い出しながら最中調整をしていた。

「彼らの成長もかなり楽しみなね…つと、うん?」

調整の為に、画面を見ると…何やらこの次元の近くに大量の敵性反応を感知した、その数は10や20じゃない…星を埋め尽くすのかと思うほどの数だった…

「これは…至急、”アレ”を展開出来るように準備しますか」

そう言っただけで同時平行で別の作業を始めた…その画面には《アンダーワールド》と書かれていた。

## 監視者は忙しい

ヴラド side

私は今日もいつも通り他の転生狩り達への依頼書等をまとめながらとある場所へ連絡をしている…

「あ、ハロハロ♪今大丈夫かい？【戦魔王】君？それとも【神獄神ゼロ】の方がよかったかい？」

そう、電話相手は少し前に罪人を配達に行つた最上位転生ハンターの一人にして【戦魔王】の二つ名を持ち、後に神となった男【荒神零夜】であった。

『どうも、時間は大丈夫ですが…普通に名前で構いませんよヴラド殿』  
「ありや？そうかい、ならそうするよ」

受話器越しではあるが、彼が苦笑いをしながら溜め息をついているだろうわかる。

『それで急に電話をできてどうしました？確かこの回線ってあまり使わないものですよ？』

あ、それと私が使ってる回線は本当に大事な用事以外では使わないどの次元にでも繋げられる回線である。

「まあ、この回線の意味を知ってるなら話が早いね♪」

『それで…用件とは？』

「あ、その前に一つ確認してもいいかな？」

『…なんででしょう？』

「次元切断や時空に風穴あけるくらいは瞬時に元に戻せるかい？」

すると受話器越しに椅子が倒れる音がした。

「どうかしたかい？」

『いや、それはこちらの台詞です!!い、一応出来ませんが…それがどうしたのですか？』

「よし、わかった…あ、ちなみに聞いた理由は…」

あまたの資料の中にある一つ資料に目を通しながら答えた。

「そつちの世界に行く理由が出来た上に今回だいが暴れる予定だからあまり爪痕を残さないようにするために聞いたんだよ♪」

『…え？い、今なんと？』

「うん？だからそつちに近い内に行くから次元切断とかの修復はよろしくね♪」

すると先程以上の音が受話器越しにした。

「おろ？おーい大丈夫かーい？」

『……………』

返事がない、ただの屍の様だ。

「つて、単に切れちゃっただけか…まあ、向こうは向こうで今大変だろうし仕方無いね。」

そう言つて受話器を戻してから先程から見ていた資料をもう一度、目を通してている。

「まさかこんなものが出来てる世界もあるとはね…一度この眼で確認しなきゃ後々面倒なことを上から言われそうだしね」

よく資料を読んだ後、机の上に置いて後ろにある調整中と書かれた二つのケースを開けた。

「まだ調整不足だけど今回に関しては調度良いレベルだから良いね♪」

そう言つてケースから「テクノヴァイザー」と「クラシックインベーター」、【ドラゴニックウオーズ】の二つのガシヤットを携えて部屋を出た。そして先程机の上に置かれた資料には…何人かの転生者と【転生派】についてまとめられていた。



## 異界からの帰還

ティーオside

現在私達は前の戦い（疾風さん所のコラボ回）での疲れを館で癒していた。

「いや〜二人共お疲れ様〜♪」

すると何処かへ行つてたヴラドが帰ってきた。

「おかえり、別にあれくらいなら問題ない」

「おかえり：流石に俺は使い方しか教えられてない力で戦わされてキツイぜ…」

私は何ともないけど、世戒はまだ鍛えてまだ一年くらいだけど流石に疲れているようでソファアの上で横になっている。

「と言うかよく一年くらいであれだけの戦闘が出来たね〜」

「そりゃ：遊矢達が龍化してブレス吐きながら追いかけてきたり、ハセヲの飛ばしてくる武器の雨を捌きながら逃げたり、アンタとの武術修行とかを重さ8tの重りを両手両足につけた状態でやり続けた嫌でも強くなる。それに：あんな能力だよりで信念も持たない奴に負けてたまるか」

「世戒…」

うん、ほんとたった一年でよく彼処まで上手く立ち回った上で別の力をうまく使っていたね…」リミッター 枷をした上で…」

「所でさつきまで何処へ行つてたの？」

「うん？ああ、さつきまで転生者狩りの友人の所に虫籠を取りに行つていてね？ほら」

そう言つてこちらに見せてきた虫籠には三つの魂が封じられていた。

紅い蝙蝠の羽根の生えた魂と左右で蝙蝠と鳥の羽根の生えた魂、そして赤い龍の羽根の生えた魂である。

「これって…」

「うん、他の方々からのご要望の為にとりあえずこうやって保管して後で増やすんだよ♪」

どうやらヴラドはかなりエグい事をやるようだ：顔が物凄く狂喜染みた顔になっている。

「う〜ん、どんな風にしようかな〜？それぞれの身体と一つの魂で繋いで身体から与えられる痛みとかはそのままダイレクトに来て、更に身体は何れだけ傷つけても回復して尚且つ力を使えば痛覚が上がっていく使用にしようかな〜♪（\*・▽・）」

…このDSはとりあえずほつとこ…：なんかヤバイオーラ見えるし…

「まあ、とりあえず肉体を複製してそれぞれの世界へ送って断罪してもらおうよていなんだよ♪あ、けど本体はこの世界で保管しておくよ？」

「保管？それは何故？」

保管する事に疑問を持って私が聞くとヴラドはこう答えてきた：まあ、予想通りなら…

「向こうの世界の誠達の為にコイツらには実験体になってもらうのさ♪」

「…でしょうね…」

予想通りで嬉しくもないものだった：彼女の実験Ⅱ生も死も無もない永久に続く悪夢である。

彼女の実験体になったものは：二度と表舞台処が存在さえも忘れられる程である。

「とりあえず龍のオーラからミラーモンスターやウィザードラゴンでも産み出してみようかな〜♪それともサバイブ烈火やアックスセイバーを精製しようかな？あと滅びの魔力でファイズブラスター作るのも面白そうだな〜♪」

そんな彼女はこれからやることを考えながら地下の実験室へと降りてい…：こうとしていたら突然とまつてこつちに振り返った。

「あ、そういえば世戒？」

「あ？なんだヴラド？」

「彼女」の命曰：明日だっけ？」

するとその質問をされた世戒はそれに俯きながら答えた。

「ああ…そう言えばもうそんなにたったんだな…明日か…後で仙豆がまんたんのくすり貰えるか？流石にこんなときまでアイツを…」シオン”を待たせるのは嫌だからな…」

”シオン”…彼が世戒になつてから初めてできた友達”だった”。彼が人間らしく振る舞えるようになった理由であり、彼が今も自身を鍛えている理由でもある。

「うん、良いよ…友達は大切にしなよ？」

「わかつてるって…もしかして要件はそれだけか？」

「いや…悪いんだけどジュウオーザライトとプロトメガウルオーダーの点検とデータの分析の為に預かってもいいかい？」

「ああ、いいぜ…その代わり預けてた”アレ”を返してくれないか？」

「いいよ、けど…気を付けるように」

ヴラドはまだあまり返す気にはなっていないが仕方なく返して問題ない物だけを返すことにしたようだ。

「ああ、それで構わねえ」

世戒もそれに文句が無いようで、ヴラドに変身アイテムを投げ渡し、彼女はそれをスキマを開けて受け取って世戒の手の上に別のスキマを開けて世戒本来の力を返してそのまま地下へ行った。

そして世戒もまた自身を鍛える為に部屋を出ていった…その後ろに私には”瑠璃色に煌めく蝶”が翔んでいるのが見えた…

世戒、英国へ…

世戒 side

ある日の事だ。

「あ？英国へ？」

「そう、英国へ行ってもらいたいんだ」

ヴラドから急に言われたせいで少し困惑した。

「とりあえず理由を教えてください」

「あ、言い忘れてたね…簡単に言うとな英国のとある場所に踏み台が転生してね…」

理由を言ったときのヴラドの表情は普段とは違ってほんの少しだけ焦っていた。

「…なんか焦ってるように見えるが…何かあるのか？」

「…まさか感情を読まれるとは…まあ、予想外の方へ転生せられてる上、そこに原作に関係する重要な人達がいるからその転生者が接触する前に討滅してほしいんだ」

「なるほど…大体わかった、少し準備してくる」

焦ってる理由はそれだけ予想外って事か…なら、早めに準備して直ぐに行くか

「ありがとう、準備が出来たら私の所に来てくれ、スキマで送るから」  
「わかった」

そう言っただけ自分の部屋に戻ってすぐに荷仕度をしてヴラドの元へ戻った。

そして少し疑問に思っていたことを聞いた。

「そう言えば向こうでそんなすぐに見つかるか？」

「あ、それなら大丈夫だよ？はい、これ」

そう言っただけヴラドは俺の腕に何か時計みたいなモノを装着した。

「…これは？」

「イレギュレター、悪性転生者の居場所に近ければ近いほど反応するレターで更に結界を張る事も出来る代物さ!!」

…なんか、何処かの○ラ○ンレー○ーみたいだな…そして相変わら

ず高性能…

あ、ちなみに今、家にいるのは俺とヴラドと遊矢達と他のペット(下級の魔物く666級まで)や使い魔くらいだ。

ティーオ達は学校へ行っている…俺と違って表舞台でも生きることが出来るからだ。

「さて、準備はいいかい?」

「ああ、いつでも良いぞ」

「それじゃ、スキマを繋いだから帰りたいときはサイガフォンとかで連絡してきてね♪」

「じゃ、行ってくる」

そう言っただ俺はスキマへ駆けて行った。

ヴラド side

彼がスキマへ入っていったのを確認してスキマを閉じ、地下の私のラボへと向かい扉を開けた…

開けた先には数多の生体維持用のカプセルが左右の壁一面にびっしりと並んでいる。中には様々な人が入っており…その中には前回のコラボによって拘束した三馬鹿の姿もあった。

「さて…今日は魂への痛覚強化と魔改造したドライバーの実験体に誰を選ぼうか…」

そう言いながらあの偽龍帝のカプセルを操作して地下アリーナに召喚したクローンに魂を繋げた。

「さてと…じゃあ、今日も実験&私の鍛練しますか…あ、ついでにストレス発散の為にねえ♪」

そう言っただ私は右手に魔改造を施した黄緑色のドライバーを、そして左手には”黒いガシヤット”を携えて地下アリーナへと向かっていった。

## 地下施設のドラゴンウオリアーズ

ナレーター side

ここはかつて数多の剣闘士達が血と汗を流しながら戦い続けた闘技場コロッセオを元に産み出されたヴラドの武装実験施設、そして今日もまた一人、実験体として踏み台転生者が召喚されたようだ…

「クツ…外セツ!!この鎖を外しやがれツ!!」

そんなコロッセオの中心で鎖によつて身体中を縛られた罪人がいた…彼の名は兵藤…兵藤…まあ、思い出す必要が無いので偽龍帝とでも呼称しましょうか（笑）

「おい!!俺は赤龍帝だ!!偽龍帝ってなんだよ!?!」

あ、物語の人物が私を認識しないでください…と言うかこつちに話しかけんな屑がツ!!

「口悪いな、おい!?!」

つと、そんな下らないやり取りをしていたらヴラドさんが来られましたね。

「あ、ナレちゃん面倒な役やらせてごめんね?」

いえいえ、これも立派なお仕事です!!あんな屑の監視でも仕事は確りやりますよ!!

「おいツ!!」

「あく…私の周囲の子達はほんと良い子が多いな♪感動したよ、今回の報酬は少し弾むね♪なんと翠屋のシュークリーム三個です!!」

「いら!!」

な、なんと!?!あの有名な喫茶 翠屋の超人気メニューのシュークリームですと!?!しかも三個も!?!

ヴラドさん…

「何かな?」

一生御供させていただきます!! (T▽T)

「泣くほど嬉しかったんだ(?!▽?!;)」

また今度買ってきたら上げるね」

ありがたき幸せ!! Σ (T▽T;)」

「おいこらッ!!無視してんじゃねえよ!?!」

「あ、いたの?」

「最初からいたぞッ!!」

え?気がつきませんでした?」

「お前、さつき会話したろ!?!」

うるせえぞ屑が、黙ってろ

「だから口悪いだろ!?!」

「あゝ…もう五月蠅いから偽龍帝にメダルをく…シユウウウウウツ  
!!」

「あべしッ!?!」

騒ぎまくる偽龍帝の相手がめんどくさくなったヴラドさんはポケットから三枚の紫のメダルを取り出して…偽龍帝にシユウウウウウツ!!した。

見事偽龍帝に命中した!!すると、メダルが肉体と融合し始めた。

「うぐッ!?!…グギガガガ…グオオオオツ!?!」

偽龍帝の身体がどんどん変化していき…。

始めに人とは思えない紫の肌…いえ、鱗へとなり、次に手や足に大きな爪が生え、最後にはまるで恐竜の様な顔となり、胴体にはトリケラの顔が着いていた…

『グルルル…』

メダルにより超☆エキサイティングしてしまったことにより偽龍帝は恐竜グリード…通称”映司グリード”へと進化しましたゝ

…まあ、進化じゃなく変異ですが(笑)

「さて…三枚だけでグリード化とは…欲深すぎでしょ(笑)」

『グルルル…ガアアアツ!!』

すると突然、恐竜グリードはその強靱な脚で一気に距離を積めて、その豪腕をヴラドさんへと振るった…が、しかしその豪腕が当たることはなかった…

「おゝ…予想以上に強化されてるけど…やっぱり所詮偽者は偽者か…そんな小さく愚かな欲で…私に勝てると思うなよ?三下★」

『グツ…ゲボハッ!?!』

ヴラドさんは豪腕を軽々と受け止めて…無防備な腹へ重い一撃を叩き込んで反対側の壁まで吹き飛ばした。

「それにね…今、」俺は怒っているんだよねえ…わかる？ テメエは何れだけの奴を傷つけてきたと思う？ だから…お前、今からサンドバックになれよ？ まあ、答えは聞いてないがな…」

するとヴラドさんは右手に黒いガシヤットを持ち、そして起動させた。（と言うかそれ以前に…なんか雰囲気変わってらっしやる!?!Σ（?・ロ?・ー））

《マイティアクシオンX!!》

すると後ろにはゲームのスタート画面みたいなものが出て、そこから灰色のキューブが複数周りに配置された。

「変身…」

そして掛け声と共にいつの間にか装着していたゲーマードライバーへとガシヤットを装填した。

《ガシヤット!!》

「第二解放」

《ガツシャーン!!》

装填と同時に右手でレバーを開き、後ろに自身のゲームキャラのアイコンが来たときに後ろに向かって蹴りをいれ、そのまま後ろを向いたまま紫の光の壁を通り抜けるとそこには一人のライダーが立っていた。

《Levee UP!!マイティジャンプ!マイティキック!マイティ アクシオン!エックス!》

まるでゲームキャラの様な顔、逆立った前髪のような頭、ゲームコントローラーの様な胸部装甲、そしてエナジーゲージに∞の文字…

その名は仮面ライダーゲム Lv. 2 アクシオンゲーマー

『グルルル…』

「さあ…ハンティングの始まりだ」

『グオオオオ!!』

偽龍帝の咆哮を合図に同時に駆け出しパンチを放つが、偽龍帝の拳を避けてヴラドさんの重い拳を再び腹へ叩き込んで反対側の壁まで



吹き飛ばした。

『グガアアアアッ!?!』

「ギヤアギヤア喚くなうつと惜しい…さっさと来い、それとも怖じ気づいたか?」

『グルルル…グガアアアア!!』

ヴラドさんの軽い挑発に乗った偽龍帝は冷気のブレスを吐いてきたがそれを避けながら偽龍帝へと駆け出した。

『グガッ!?!グオオオオ!!』

無論、これ以上攻撃を受けないため偽龍帝は必死でブレスを吐くも全てかわされ、遂に目の前まできた。

そしてヴラドさんはガシヤットをドライバーからキメワザスロットへと装填していた。

「いくら強力な攻撃でもな、ここまで単調だと…」

《キメワザ!》

『グオオオオ!!』

真つ直ぐに先程以上の強力なブレスを吐いた…しかし、着弾地点には誰もいなかった。

『ッ!?!』

「当たるかよッ!!」

《マイティ!!CRITICAL STRIKE!!》

偽龍帝が後ろを振り返った時には既に遅く。

紫のオーラを纏ったヴラドさんのキックが偽龍帝へと決まっていた。

《会心の一発!!》

『グガアオオオオッ!?!』

「吹っ飛ばッ!!」

そして偽龍帝は向かいの壁まで吹き飛ばされ、更に壁にめり込んでいた。

《PERFECT!!》

「ふう…さて、始めるか」

するとヴラドさんはキメワザスロットホルダーに差してあった

白い龍型のガシヤットを偽龍帝へ向けて翳すと…

偽龍帝から赤と紫のオーラを吸収し、そして吸収が終わると絵柄が浮かび上がりガシヤットを起動した。

《ドラゴニックウオーズ!!》

起動と同時に数多の龍の咆哮が鳴り響かせながら施設を震わせた、そして目の前には白銀の龍型ゲーマー”ウオーズゲーマー”が翔んでいた。

「君がウオーズゲーマーかい？これからヨロシクね♪」

『ギャウウ〜♪』

するとウオーズゲーマーはヴラドさんを主人と認めたのか甘えるようにすり寄ってきました。

「お、おう…見た目と名前の割りに甘えん坊なんだね〜？」

(まあ、普通そんな簡単に龍種が甘えるわけないけど…多分、戦闘力とか他諸々で決めたんだろうね〜…まあ、一番の理由は自分の生みの親だからだろうね…(？▽?；) )

さて、偽龍帝は〜…あ、あれ？あの〜ヴラドさん？

「うん？ナレちゃんどうしたの?」

ウオーズゲーマー撫でてるところすみませんが…いつの間にメダル回収したんですか？

「…え？私、まだ回収してないよ? (？▽?；) 」

え…だ、だけど偽龍帝の変異、解除されてますよ?

「…マジで?」

マジです (？▽?；) )

「となると…今、メダルは〜…」

『ガウウ〜♪』

まあ…そうなりますよね? (？▽?；) )

「こんなの予想できるか!?!Σ (？□?ーー) 」

アハハハ…って、偽龍帝起きましたよ?

「あ、目が覚めちゃったのか〜…めんどくさいね〜?あ、ナレちゃん仕事上がついていいよ?」

そうですか?では、お疲れさまでした〜♪

ヴラド side

そんなこんなナレちゃんには仕事を上がってもらって私視点のスタートだよ!!

「グツ…で、テメエ…：よ、よくもやりやがっ…：たなツ!! 覚悟は出来…  
てるだろうなアツ!!」

…まあ? いきなりズタボロの状態でよろけながら立ち上がってそんな威勢だけ台詞を吐く偽龍帝くんのシーンだけどね?…よく立てるよね? 主人公でもないのにね?

「覚悟って何の覚悟かな? 君をフルボッコにする覚悟かな? ド低能三下くん?」

まあ、それでもそんな姿の相手でも、私は嘲笑うし毒舌も吐くよ? それが私だからね (笑)

「ダ、ダマレエエ!!」

《Welsh Dragon Over Booster!》

すると偽龍帝はもう使えるはずのない禁手を発動した…：したけどね?…?

「な、なんだよ…：これツ!」

そう…：偽龍帝が発動した禁手、通称…：偽龍帝の鎧は錆び付いたような見た目をしていた。

「ふぎけんなよツ!! 俺はオリ主だぞツ!! そんな俺がなんでこんなふぎけた姿なんだツ!!」

「愚かだね…：自分の身の丈を計れず、身の丈以上の力を求めたからだよ?」

「テメエが何かしたんだろツ!! 何が身の丈に合わない力だツ!! 俺の方が一誠何かよりもずつとアレを使いこなせていた筈だ!!」

…：ここまで来ると怒りも呆れも通り越して拍手が起きますね…：まあ、しませんがね? と言うか聞き捨てならない台詞が出たね?…?

「ハア? お前…：腕代償で4秒しか禁手使えなかったり、戦闘にあまり慣れてなかった頃のタケルにゼロスロットさんの力を使って負けたり、しかもゼロスロットさんの力合っても全敗な癖に何言ってるの?」

馬鹿なの？」

「と言うか発動しただけでも幸せなのに高望みも良いところだよ？」

「ふ、ふぎけんナツ!! あ、あんなの本気を出せば勝てる戦いばかりだから敢えて力を抑えてやっただけの事だ!!」

「へえ〜? 力を抑えて…ねえ〜? けど、さあ〜: 君の本気って結局ゼロスロットの狂化だよな? あんな程度で凶に乗ってるって思うと…笑えるね (笑)」

「ハッ!! どうせ今から貴様は俺に殺されるんだ笑いたければ笑いながら…死ねえツ!!」

「甘い」

「グガッ!」

「そんな真正面から格上相手に拳を振るって来るなんて…馬鹿にも程があるだろ？」

「無論、あつさりかわして背中に蹴りを一発入れて吹き飛ばしてやった。」

「ほらほら、かかって来いよ…それとも終わりかい? オリ主 (笑) くん?」

「ダ、ダメレツ!!」

「そしてまたバカ覚えにブースターで加速しながら拳を振るってきた」

「だから遅い・鈍い・軽い・三拍子揃った攻撃だよ」

「グギガッ!」

「加速しながら拳を振るってきたけど…動きが遅い、攻撃までの行動が鈍い、そして片手所か指でも止めれるくらいの軽い攻撃とか呆れるわ…とりあえず踵落とし喰らわして地面とキッスさせた。」

「呆れるくらい弱いね…うん、他の奴等のがまだ力の使い方がなつてたよ…ここまで下手なやつはいなかったね」

「ダ…: マ…: レ」

「いいや、黙らないね!! はっきり言ってやるよ…お前は最弱最低最悪で自己中なサイコ野郎だよ!!」

「ダメレエエエツ!!」

《Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!  
!》

私の言葉にキレて赤龍帝の力を使って来たけどさあ…最初に言っただけど…俺の方がキレてんだ…三下が凶に乗ってるじゃくねえよ。

「ウォーズゲーマー」

『ギャオオオ!!』

「なツ!?邪魔すん…グボアツ!?!」

…私は時間稼ぎを命令したのにアイツ…あの程度の攻撃で吹っ飛ぶのかよ…さて、もう決めるか

「第五解放」

《Level UP!マイティジャンプ!マイティキック!マイティアクション!エックス!!アガツチャ!咆哮!眼光!ドローゴニックウォーズ!!》

激しい音声に合わせ、ウォーズゲーマーは私へと装着された。

仮面ライダーゲーム Lv. 5 ウォーズアクションゲーマー

「さて…なるほど能力は大体わかった…なら、さっさと片付けるか」

「そ、それはこっちの台詞だツ!!」

《Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!  
Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!》

「なら…こっちもやるか…」

《Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!  
Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!  
Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!》

「なん…だとツ!?!」

どうやらかなり驚いてる様だが…この程度で驚いてたら後が大変だぞ?

「何驚いてる、そんな暇があるなら…防御くらいしたらどうだ?」

そう言つて奴の懐へと一瞬で近づき…

「なツ!?!しまツ…グボアツ!?!」

好きだらけの奴の腹へ左腕の武装…ドラゴクローブラスターで殴り付けた。

「ついでにおまけだ」

《Divid!Divid!Divid!》

「なツ!?なんでそれまで使えるんだよツ!？」

「あ?そんなのお前が知る必要は…ねえよ」

《Remote》

そして右腕のドラゴリモートブレードで奴の心臓部分を貫き、そしてその上で禁手を解除してやった。

「ゴフツ…な、なんで?なんでだツ!?なんで…禁手がかつ…てに消…えた…んだ?」

「だから…もう知る必要は…ねえよ」

《キメワザ!》

ガシヤットをキメワザスロットに装填し、力を全て右腕へ集中させ…ついでにアイツの足をドラゴフリーズレッグの冷気発生で凍らせた。

「あ…あああッ!!」

「ああ、そうだ…最後に何か言いたいことはあるか?」

まあ、願い聞いたところで…

「た、頼…む!!い、命だけは…助け…てく…れ!!」

ただ聞くだけでその通りにする気は無いがな?

「ふくん…あつそ、じゃあね?」

《ドラゴニック!CRITICAL STRIKE!!》

「あ…アアアア…アアアアアッ!!」

無慈悲にも右腕を振り下ろして一刀両断!!

目障りで情けない叫び声と共に消え去った。

それを確認した後に変身を解除して研究室へと向かった、すると電話が鳴っていた。

「ふう…って、ハイハイもしも?あ、どうもご無沙汰で…え?またですか?ちよくと多くないですか?今年だけで転生者狩りならまだしも誤認転生とか…しかもこれで三回目ですよ?馬鹿ですか?あ、それは認めるのですね…で?その人を私に?…流石に少しキツイので代わりの人を探して私の代わりにやってもらおうのはありかい?あ、そ

れならいいよ♪あと今回ミスした方は…ああ、あの方ですか？なら流石にお灸を据えに行きますとだけ言っておいてくださいね？あ、いつ行くかは私の気分とも言っておいてくださいね★それじゃ、これで…」

そう言つて電話を切つてまた別のところへと電話をかけた。

「あ、もしもし？実はさっきね？誤認転生依頼が来てね…それで少しお願いなんだけど…そっちでも探しておいてくれないかな？そっちへ行くときにお土産連れて行くから…え？良いのかい!?ありがとう♪そっちへ行つたときにハグをしてあげよう!!つて、え？お土産だけで充分嬉しいので大丈夫ですつて？うくん…うん、わかったよ♪それじゃよろしくね♪」

そう言つて電話を切り、ゲームードライバーをケースに入れて置いた。

「さて…そうと決まれば早速行きますか♪」

そう言つて空間に裂け目を作つて”後輩達”の元へと”三馬鹿クローン”をトライゴラムで引きずりながら向かった…

ゲームードライバーの入られたケースの近くには《試作品N〇・695・煉王ベルト》《試作品N〇・696・隸汽ベルト》と書かれたケースが置いてあつた。

## 次元巡りし我らの領域

ヴラド side

どうもヴラドです、突然ですが…非常事態になったので世戒以外のメンバーを召集しました。

「さて、色々言いたいことがあると思うけど先に言わせて…侵略者が来るからこれから私が展開する大結界で重要な柱を皆に護ってもらいたいけど…あ、皆まで言うな…答えは聞いてなから、いいね?」  
「質問する気がないなら最初から聞くな!!だが、わかった!!」

いつも通りネタを混ぜるとユートとハセヲがツツコミをいれるけど、皆さっきの話で納得してくれたみたいだ。

「とりあえず二十分くらいは絶対に柱を護ってね?あと柱の場所は皆のデバイスに送っておいたからすぐに散らばってね?あとこれから私はこのメンバー以外の時間を一時的に止めた後に結界を張るから、皆は時間が動き出すのと同時に行動開始してね?」

『了解!!／おう!!／わかった』

私の問いにみんな答え、作戦会議を始めたのを見て、私は地下深くの施設へと向かい表世界の時間停止と大結界の準備を始めた…

テイオ side

「さて、ヴラドも言っておたけど早速場所を決めていくよ」

そう言っただバイスから地球の立体映像を出し、そこに表示されている19の拠点を見せた。

場所はロシア、フランス、カナダ、オーストラリア、アメリカ、ブラジル、イタリア、イギリス、ギリシャ、モンゴル、ドイツ、オーストリア、アルゼンチン、ペルー、インドネシア、アラスカ、インド、アフガニスタン…そして日本。

「日本は私が守るからそれ以外をお願い」

『了解!!』

そういつて全員それぞれの場所へ向かった。

そして私も持ち場につき、一対の剣を出して迎え撃つ準備をした。



「…この世界は私を拒まない世界…壊させない…均衡を崩すイレギュラーは…全て滅する」

そう言いながら空を覆う黒いモノ共に対して殺気を当てた…

「覇邪神龍帝…いや、今回はこの名じゃないね…」

”真名”を告げるために少し深呼吸し…告げる。

「無にして全、虚無を統べし虚天の龍皇、二創龍ティールオの真名…虚匣天龍皇ティールオ、これより我が領域に入りし異<sup>イレギュラー</sup>物を殲滅する…覚悟しなさい」

そして黒い奴等に向かって駆け出した。

夜空 side

「…ふう〜」

俺は師匠に言われた通り、持ち場にてその時を待っていた…

「まさか異世界からの侵略なんてなくアハハツ!!…けど、俺のやることは変わらねえ」

そう言いながら腰に”ロストドライバー”を装着し、白いメモリーを鳴り響かせる。

《エターナルツ!!》

「俺達の世界に攻め込んできたことを後悔しろ…あの世でなツ!!」

そしてエターナルメモリーをロストドライバーに装填し、告げる。

「変身ツ!!」

《エターナルツ!!》

蒼い炎と金色の風を纏い、風が止むと…そこに顕現したのは、かつて風都を地獄へと落とした”白き死神”にして”永遠”の名を持つ悪魔…仮面ライダーエターナル。

「さあ、行くぞお前らツ!!死神のパーティータイムだツ!!」

『『オオオオオオオオツ!!』』』

黒いマントを風でたなびかせ右手にナイフ型ガイアスロット”エターナルエッジ”を携えて数多のマスカレイドドーパントを引き連れ、侵略者達を迎え撃ちはじめた。

桐生 side

「ふう…：やっぱり凄いなね…」

先程、姫様から送られた敵の数をみて、改めてとても馬鹿げてると思っただ。

「さあ…：お姫様に褒めて貰うために人肌脱ぎますか♪」

そう言っただ空虚を見ながら立ち上がり、あるものを召喚した。

「久々だけど、行くわよ？キバット」

『ああ…：喜べ絶命タイムだッ!!』（ガブッ!!）

すると桐生は黒い蝙蝠型ファンガイア”キバットバット二世”に手を噛ませると、顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がり…告げる。

「変身ッ!!」

その掛け声に応じキバットバット二世は桐生の腰のベルトに装着され、表面にその意匠が浮かび上がり硝子の様に割れ…：その姿を現す。

そこにいたのは、全てのファンガイアを統べし紅の皇”仮面ライダーダークキバ”。

「さあ、行くわよアンタ達ッ!!久々の戦争だ!!心してかかれ!!」

『『『オオオオオオオ!!』』』』

そしてその眼下に存在する同胞であるファンガイア達に一声をあげると…：マントをたなびかせながら戦闘を開始した。

松田 side

「なあ、元浜」

『ん？なんだ松田？』

「俺達は今、凄いことに直面しているな…」

『ククク…』

俺は今、画面越しに親友である元浜に少し武者震いしながら言うと思われた。

「な、なに笑ってんだよ？」

『いやいや…：あの恐れ知らずのお前でも武者震いするんだなって思う』

と…笑えてきた(笑)』

「おいテメエ…帰ったら一発殴るからな!!」

『そうそう、お前はいつも通りそっちのが良いんだよ…緊張解けたか?』

その言葉に驚いた…無意識の内に緊張なんてらしくないものをしてたのか…そう考えた途端に笑いが込み上げてきた。

「ククク…アハハ!!わりいな、変に気を使わせちまってよオ!!」

『何、こつちも少し緊張解しにはなった…つと、そろそろ行くぞ?』

そう言うのと元浜は黒い携帯”オーガフォン”を取り出した。

「ああ…言われるまでもねえ、行くぜ!!」

そう言うて腰に着けているドライブドライバーのイグニツションキーを回し、手に持っていたソフトハートロンを起動した。

《Fire… All Core…!!》

それに合わせて元浜もオーガフォンにナンバーを入力して、それを天に掲げ…そして同時に叫んだ。

『変身ツ!!』

《complete…》

《ドライブ!タイプ!ミラクルツ!! ハート・ザ・カメンライダーツ!!》

赤い装甲に赤い腰マント、金色の角、左肩には黒いタイヤに身を包んだ松田…

その姿は、かつてロイミュード達を束ね、人類と対立し敗れ…再び生を手にいれた時、人類を護るために仮面ライダーとなった一人の戦士にして怒りの化身…No. 002ことハートロイミュード、またの名を…仮面ライダーハート

金色の線の入った黒い装甲にΩを表したヘッドパーツ、腰には金と黒の剣を携えその身を纏う元浜…

その身の姿は、かつて人とオルフェノクの共存を願いながら散っていった一人の帝王の姿…その名はホースオルフェノク、またの名を…仮面ライダーオーガ

「さあ…行くぞテメエらツ!!祭りの始まりだア!!」

『ああ、この世界の為に…そしてお嬢の為に勝つぞッ!!』

「『オオオオオオオッ!!』」

『さあッ!!こっから先は通行止めだッ!!』

そして二人は互いに仲間達と共に戦いを始めだ。

## 次元巡りし二創龍の咆哮

テューオside

「立てるか?」

「……」

そう言っただけで彼―エイザスはこちらに手を差し伸べてきた…けど、私はその手を掴まずに私は立ち上がった…その時の彼の顔は少し寂しそうだった。

「それで…なんで此処に貴方がいるの?」

「随分な言い方だな…お前が心配で助けにきたじゃ、駄目なのか?」

「なッ!?!?!」

ま、真面目な顔で何を言ってるの!?!雰囲気とか色々あるでしょ!?!と  
言うか…

「せ、せめてそう言うのは…ゴニョゴニョ…!?!」

「うん?どうした?」

「な、なんでもないッ!?!」

と、とりあえずこれ以上喋っていると色々ボロを出しそうだから早くこの場を離れたいのに…いつもより傷の治りが遅い!!

「おい、大丈夫か?なんか焦ってるように見えるが…」

「な、なんでもない!?!気にするな!?!」

話しかけてくるなあ…!?!

これ以上、話しかけられると心臓がバクバクうるさくてヤバイの!!

その上、私を庇いながら転生者達からの攻撃を捌いて殲滅してるとか…イケメンか!?!

「ッ!!危ない!!」

「へ?って、わッ!?!」

いきなりエイザスが私をお姫様だっこしてきて跳躍したかと思うときつきまできた場所には巨大な黒いレーザーが降り注いでいた。

「ふう…大丈夫か?」

「な…なななッ!?!お、下ろしてッ!?!」

「って、おい!? 暴れるな、落ちるだろ!？」

「こんな近くにエイザスの顔がある…しかもこんな状態とか…恥ずかしくて死にそううッ!?／／／

「も、もう傷は治ったからッ!! 自分で動けるからッ!! だから下ろし…ひやうっ!?!／／／」

「へ?…って、す、すまん!? わざとじゃないからな!?!／／／」

「う、ううう…／／／ (涙目)」

や、やつと下ろしてくれたのはいいけど…だけど…む、胸を触られた…

「もうお嫁にいけない:／／／ (涙目)」

「す、すまんッ!! 責任はとる!!／／／」

「ほんと?／／／ (涙目)」

「ゴフッ!?!／／／ (吐血)」

「え? だ、大丈夫?／／／ (涙目)」

地面に座って顔を伏せてたらエイザスがあんな事を言ったので顔を上げて見上げたら突然吐血してぶっ倒れた。

そんなこんなしていたらヴラドから念話で通信が入ってきた。

『あく…大丈夫?』

「いきない何? (キリッ)」

『いや〜ついさつき結界の安定が終わって様子をみてたけど…珍しいものが見れた (笑)』

「おい、こら (怒)」

通信越しでもヴラドの嘲笑っているのがわかるくらい声が笑っている…うん? ついさつき? ま、まさか…

「えっと…いつから見えた?」

『……』

「まっつて、いつからなのツ?!」

すると突然目の前に画面が映し出されたヴラドは笑顔でサムズアップしながらこう言ってきた。

『素直になってキスしちやいなYO〜♪』

「や、やかましいわッ!?!／／／」

『あ、それとエイザスにも言いたいことあるからそろそろ起こして?』  
「と言うか今戦闘中…そういえばなんでこっちは攻撃されてないの?」

『え?だつてえ…』

するとヴラドが高揚とした笑みで少し語りだした。

『あんな面白い二人を邪魔したりとかさせると思う♪』

「ああ…つまり分身を使ったのね…」

『しかもアライバルとガイスト、そして更にドライグにオーフィストとグレートレッドの三人にも手伝ってもらってます♪』

「あ、あはは…」

なんかツツコミすらバカらしくなってきた、とりあえずエイザスを起こして会話をした。

『とりあえずウィルさんからも聞いていたけど…こう並ぶとお似合い夫婦だね♪』

「いいから!!もう、そう言う煽りはいいから!!／／／」

「娘さんを俺にくださいお父さんツ!!」

「き、君もいきなりなに言ってるのツ!?!／／／」

『君になら任せられる、よかろうツ!!』

「ヴラドも変に乗らないでくださいツ!!／／／」

なんでこんなに疲れるの…あ、そうかボケる人しかないからか…  
「とりあえずさつさと話をして…」

『お、そうだね?とりあえずエイザスとティーオは雑魚を倒しながら中心部へ向かって?』

「え?そ、そっちは大丈夫なの?」

『まあ、ドラゴニックウオーズとかグレイトフルとか使っても殲滅していくから問題は無いよ♪』

「そう、なら…」

「ああ、そう言うことなら…」

私とエイザスはヴラドからの返答に頷いて同時に武器を構えて広範囲砲撃してから駆け出した。

「さつさと終わらせるツ!!」

そう言つて上空の大群へと同時に突っ込んでいった。

そして数多の敵が一齐に攻撃してきたけど、私もエイザスも剣や鎌でいなしながら突き刺して燃やし、切り払ったり、魔法で殲滅していった。

「俺達を…」

「私達を…」

「嘗めるなツ!!／嘗めないでくださいツ!!」

その言葉と同時に一齐に魔法で消し飛ばして回廊を切り開いた。



## お忍び視察はトラブル注意？前編

ヴラド side

ハロハロ♪画面の向こうのレディー&ジェントルマン！少年少女の皆様お久し振りです!!

久々に自分の小説で書かれるヴラドでございます!!

本日はですね〜

「任せたとは言え、一応管轄担当は私だからたまには自ら足を運んで確認しに來なきゃね〜」

私は今、うちの子達に任せたとある世界に來ています。

まあ〜…ね？理由としてはお忍びで來ることで真面目にやってるか〜とか、レポートとの違いは無いかな〜とかって理由なんだけどもまあ、うちの子達は基本的にその辺真面目だから安心しているんだけどね？（薫ちゃんはちよ〜とその辺が心配だけどね…（汗））

「さて、町の方は問題は〜…あるけど既に対応してるからいいかな？」  
現在、眼と鼻の先で未っ子の夏煉ちゃんが変身して戦闘を始めた。  
陽くんからの連絡で現地での調査は彼女が担当してるようだし、確か陽くんは修行も兼ねているって言ってたね。

「夏煉ちゃん一人で問題無さそうだし手出したら逆に迷惑かもしれないし…そもそも今日の私はお忍びできてるから驚かれそうだからいいかな？そいじゃ夏煉ちゃんは大丈夫そうだし原作主人公組の所にでも足を運んでみようかな？」

そうと決まれば善は急げ、恐らく今は物語的にフェニックス編辺りだから主人公である兵藤一誠達が現在特訓してるであろうグレモリー所有の屋敷のある山の方へと向かうことにした。

<少女？移動中>

しばらく山の中を散策しながら目的の場所に着いたのだが…

「人払いの結界か…：どうしようかな？」

目の前には山の一部を囲うように結界が張られていた。

まあ、確かに神器やら魔力やら使うから一般人に見られたら駄目だから結界を張るのは当たり前だね？

問題は穏便に済ませるためにどうやって結界を壊さずに中に入るか…

「…あ、この程度の結界ならゴースト系ライダーになれば通り抜けられるか」

今回は穏便に済みたい為、すぐに行動に移した。

懐から懐かしのガイスト眼魂を取り出し腰に召喚したゴーストドライバーにセット。

『コツチヲミロー！コツチヲミロー！』

『カイガン！ガイスト！ヒユイゴー！覚悟！操りゴースト！』

「この姿になったのも久々だなく結構色々造りすぎたせいで使っていない物も多いな…：さて、この話は一旦置いておくかな？」

変身後、結界をすり抜けて森の中へと歩いて行つた。

しばらく森の中を散策すると大きな別荘みたいな一軒の館が建っているのが見えてきた。

その近くに目的の相手の気配を感知したので変身を解き、目的を果たすために歩み寄っていった。

## お忍び視察はトラブル注意？後編

木場 side

僕達オカルト研究部は数日後にある部長とライザさんの婚約を賭けたレイティングゲームの為に部長の別荘で特訓をしていた。すると近くの林からこちらに誰かが向かってきた。

「ハロハロ〜♪」機嫌は如何かな若手悪魔諸君？」

その人物は僕達を悪魔とわかつてる上でとてもいい笑顔で気さくに話し掛けた…。

しかし、その笑顔とは違い纏っている覇気のようなものに畏怖の念を感じ気を確かに持っていなければその場に崩れてしまいそうになつた。

一体この人は何者なんだ!?

ヴラド side

陽気に笑顔を心掛けて気さくに話し掛けただけに思いっきり警戒されてしまった…何故だ？

そんな事を考えていると紅髪の出るところ出てるJK…リアス・グレモリーが滅びの魔力を手に纏わせ此方を睨みながら立っていた。

「ん？お嬢さん何か言いたいことでもあるのかい？」

「…貴女、私達を悪魔と知った上で話しかけてきたわよね？なら…此所が誰の領地かわかった上で侵入してるのよね？」

なるほど滅びの魔力を脅しとして使っているのか…

まあ、此所が何処かなんてわかりきってるんだけどね？

「ここは君達悪魔の長である魔王達が日本神話の許可も取らずに”勝手に”領地にした悪魔領でしょ？なんでそんな大きな顔ができるのかねえ〜？」

「なツ!？」

「と言うか大きいのはその発育が凄い身体だけにしておきなよ、レディー？」

「黙りなさいツ!!」

「おっと」

私の領地に対する発言とセクハラ紛いの発言にキレて攻撃をしてきたけど、速度が遅かったので簡単に避けた。

まあ、避けたせいで後ろの木々達が少し可哀想な事になってるけどね？

「いきなり攻撃とは失礼な娘だね？ 非常識にも程があるよ？」

「黙りなさい!! お兄様を…魔王様達を侮辱した事を後悔させてあげるわツ!! 朱乃! イッセー! 勇斗! いくわよツ!!」

「ええ、良いわよりアス」

「部長、いつでも行けます！」

「…わかりました、部長」

どうやら先程の発言でブチキレたようだ、器が小さいかな？

あと他のメンバーも一緒に来るみたいだけど…木場勇斗かな？ 彼だけ物凄い冷や汗をかいてるけど大丈夫かな？

まあ、返事してたからには戦意は有るみたいだね？

「このリアス・グレモリーを怒らせたからには生きて帰れると思わないことね？ 骨すら残さず消し飛ばしてあげる!!」

「あらま〜怖い怖い♪なら私も…少し本気でいきしょうかね？」

「え…おい、それってツ!？」

『ア—イ!』

私がゴーストドライブバーを召喚してガイスト眼魂を取り出した際にイツセーが声を上げてたけど気にせず眼魂セット!!

そのまま変身だー!!

『コツチヲミロー! コツチヲミロー!』

「へ〜ん…しんツ!!」

『カイガン! ガイスト! ヒュイゴー! 覚悟! 操りゴースト!』

レバーを押し込み黒をベースにしたパーカーゴーストを纏い、左右非対称の二本の角を生やしたゴーストへと変身した。

「も、もしかしてお前も…」

「改めて初めまして…私の今の名は仮面ライダーガイスト…今から君達を試す者だ」

そう名乗った直後に滅びの魔力が飛んできたので片手で弾いた。

滅びの魔力なので誰がやったかは一目瞭然、その方向を見ると顔を下に向けているせいで表情は読み取れないが…纏つてる魔力的に恐らくブチキレてるんだろうなく。

そんな風に考えていたら突然顔を上げた…そこにあつたのはどう見ても年頃の女性がしていい顔じゃない…もはや般若の顔だ。

「仮面…ラアアアイイイイイダアアアアアアーツ!!」

「わー…凄いイントネーションだね?」

「貴女達さえ居なければ…貴女達さえ居なければツ!!私にはアアアアアアツ!!」

「二リアスツ!?／部長ツ!?!」

あまりの発言に感想を言おうと魔力を纏った状態で一人で突っ込んできた。

その行動と彼女の表情、発言に彼女の券族達は驚愕の表情を浮かべながら固まっていた。

そして彼女も券族達の事を気にせず此方との距離を詰めながら滅びの魔力を放つて来る、私はそれを片手で弾いていく。

…そしてほぼ零距离まで詰めてきた。

「これで…消し飛べエエエエツ!!」

「あ、ヤバ…」

高密度の滅びの魔力を零距离で弾く前に放ち回避も間に合わずに直撃した。

放った彼女も反動で吹き飛んだが券族達によって受け止められた。

「リアス、大丈夫ですか!?!」

「二部長ツ!!」

「…ええ、大丈夫よ…ふふふ…やったわ…流石にあの仮面ライダーでもあんなもの喰らえば「ただじゃいられないでしょうね?」…え?」

### 三人称 side

リアス・グレモリー一同は先程仮面ライダーガイストがいた方向を見た。

まだ砂埃でよく見えないがあれほどの魔力を…しかも滅びの魔力

を零距离で受けたのだ、もし生きていたとしてもすぐに動けるはずがない!! そう考えていたが、彼女達はまだ知らない:自分達が十二を相手にしているのかを……

ヴラド side

「アタタタ:いや、流石に格下とはいえ柄にもなく油断なんてしちゃったよ、失敗失敗♪」

「嘘:でしよ……」

先程の攻撃で少し痺れたので砂埃が晴れるまで休んでから立ち上がって彼女達の方を見ると先程まで般若の様になっていた真つ赤な顔が今は青ざめた表情になっていた。

「おや?どうしたんだい?まるで自分の今現在で最大の攻撃を零距离で放ったのに無傷でケロつとしてることに絶望してるのかな?かな?」

「ーッ!?!」

「:凶星らしいね?まあ、いっておくけどこれでも私は」とある神話系統のトップ”で”とある子達”をまとめてるからね?これくらいで倒せるなんて思わないことだね……」

ほんの少し顔を伏せてから顔を上げてる彼女達に言ってあげた。

「調子に乗るなよガキ共が」

「「「ーッ!?!」」」

ほんの少し神性と殺気を込めた言葉を笑顔で発したら全員腰を抜かしたのか座り込み青を通り越して白い顔になっていた:と言うかイツセーにいたっては泡吹いて気絶してるし……

それを見て殺気も神性も引つ込めて、少し話をしよう。

「まあ、君達の人生はこれからだし弱いことは気にしなくてもいいけ

ど…先人として一つアドバイスしておくよ？生きていたいなら君達の知っている”仮面ライダー”には手を出さない事をオススメするよ？…あり？おーい話を聞いているかい？」

大切なアドバイスをしてあげてたのに返事も返さないの何事かと思つて近寄つて見ると…なんと皆、気絶してました。

可笑しいな、そんなに殺気当ててないのになー？

「…まあ、気絶してるものはしょうがないか…あ、そうだ!!怖い思いさせちゃった償いとして少し改造してあげよう!!!」

そうして私は少し彼女達を魔改造ゲフンゲフン…強化してあげました!!

どんな風に強化したかだつて？フフフ…それは私の部下であり家族でもある末っ子の”鬼町 夏煉ちゃん”の物語が描かれている悪維持さんの「ハイスクールD×D 〽煉獄の少女〽」を見てくれたまえ!!!

さて、軽い宣伝もしたし近くにいるはずの陽くんの所によつて行くつと♪

## 序章く平穩を好む災厄の神く プロローグ

―彼女は対となる存在に負けた―

―彼女は大切なものを壊された―

―彼女は世界に厄災をもたらした―

―彼女は世界に眠りにつかされた―

これはそんな彼女の現在の事だ：

??? side

俺の朝は早い。

自分の主は少し朝に弱い為、朝食はいつも俺の担当だ。

「あ、ハロハロく♪おはようハセヲ」

「ああ、おはようヴラド」

彼女？の名はヴラド。

能力で性別とかを変えられるため性別不明の人外。

彼女曰く種族は吸血龍らしい：つまりヴァンパイアドラゴンだ。

ああ、あと俺は”人”としての名はハセヲだ。

「朝食はまだ出来てないから顔洗ってこい…」

ああ、あと御主人を起こすのも頼むは」

「ホイホイ♪」

よく分からない奴だが：悪いやつでは無いので信用は出来る

「…今日は豚汁と卵焼き…あとは焼き鯖でいいか」

「ふあく…おわよくハセヲ…むにゃ」

「ああ、おはよう御主人…顔洗ってこい」

「ふあくい…」

さっきのが俺の御主人、兵藤一誠だ。

彼女はまだ10歳くらいの少女だが：一つだけ普通じゃない所が

ある、それは…

彼女は前世の記憶と能力を持っている、そしてかなり強力な存在だ。



…まあ、それでも朝に弱くがな？

「ふう…さつぱりした」

「そうか、朝食出来たぞ？」

「わかつて、ピンポーン／＼…こんな朝から誰？…って二人くらいはいたわね」

そう言つて御主人は玄関に向かつて行つた…

朝食を少し多めに作つて正解だな。

「お邪魔します」

「邪魔すんなら帰れ真龍と龍神」

彼らは真なる赤龍神帝グレートレッドと無限の龍神オフィス  
強力な龍神だが、今の彼らは青年と少女の姿をとっている。

「はっはっはっ、冗談がキツいな!!」

「我、お腹空いた」

「テメエら御主人に会いに來ただけだろうか？（怒）」

「悪い？」

「…ハア…とりあえず座れ、飯が冷める」

そう言つて俺が座ると御主人達も座つて、オフィス達を座つた。

「それじゃく手を合わせて…」

「…いただきます」

少し前はこんな風になるとは思つてなかつたな…

くくくくくくくく

『…君も…一人かい？』

『…小娘、一体どうやつてここへ來た？』

誰も入つて來れない空間創つた筈なのにアイツは來た

『偶然』

『嘘をつくな!!そんなもので來れるわけ無いだろ!!どうやつて來た  
!!!』

どれだけ覇気をぶつけても…アイツはそよ風程度にしか感じてな  
かった…いや、

全く怯みすらしなかつた。

『君は…寂しくないのかい？』

『…何故だ?』

『だって…こんな何も無い無空間でつまらなくないの?』

『…だったらどうした?』

そう答えたらアイツは…

『それじゃあ—』

片腕を振るって…空間を…”切り払った”

『こんな所から出て、一緒に行こうよ!!!面白い物がいっぱいあるよ!!!』

そして笑顔でこう言ってきたのだ…

—面白い!!!—

俺は心の中でそう思った…だからだろう

『そうか…なら—』

あの時…ああ言ったんだろう

『楽しく無ければ食い殺すからかい?』

『うん!!!』

そして、あの笑顔を信じて俺は契約したんだろうな…

く　く　く　く　く　く　く

…さて、今日も世界は平穏だ…

目の前で御主人に手を出そうとするロリコン（真龍）を除いて…な  
?

転生に選ばれたものたち…

???  
side

ここは転生をするものがくる空間…

つい先程まで色々なものたちが居たがな？

くくくくくくくくくく

「うっ…ここは…何処だ？」

『ほおほお…よく来たのお』

「だ、誰だ!？」

この小僧…なにやら魂が濁っておるの

『ワシか？ワシは転生をさせるものじゃ』

「え!?て、転生ってあの転生だよな!!!能力もらっう、あの!!!」

どうやら転生がどういうものか知ってる様じゃな

『うむ、その通りじゃ』

「オオ!!!な、なら一体何処の世界だ!!!」

転生出来るって聞いた瞬間に心が更に濁ったの…

『転生先はハイスクールD×Dと呼ばれる世界じゃ』

「フッフ…なら王の宝物庫と赤龍帝の籠手とニコポナデポと精神操作

だ!!!」

『お、おい…まだ何も言つとらんぞ』

しかも危険なものもあるの

「アア!!!うっせい!!!俺がオリ主になるんだから此れくらい付けろ!!!」

…此処まで濁るとはの…ハア…

…仕方無い、なら”あやつ”には悪いがあの世界に送るか…

『…良かろう、特別じゃ』

「ふはは!!!当たり前だ『但し、貴様の知る世界とは平行世界に送るからな』だ?」

『それじゃあのと(ガチャッ)』

「お、おい待つ(ボタン) ギャアアアアアアアアア!!! (ヒューン…ボタン)」

『ふ…スッキリした!!!』

くくくくくくくくくく

『…やはり、あやつには謝らんとな…ハア…』

「別にいいんじゃないかな？」

『ほお…来たのか…ヴラド』

そこには中華風の服装に龍の様なマフラーをした人外がいた

「やあ、所で…ドライグの反応が有ったけど…何か可笑しかったよ？」

…あの小僧…やはりしたか…

『それは転生させた小僧の精神操作によってドライグを縛っているからじゃろう』

「なっ!?何でそんな事を!!」

『…恐らく自分がオリ主なんてありもしない者じゃと思っているからじゃろう…』

本当、気持ちの悪い考えじゃったな…

ハーレムなんざ、あやつには無理じゃろう…

「…遂に此方に転生者が…」

『どうじゃ?変態を潰す仕事を受けないかのお?』

「…ハア…どうせ”あの子”が一誠なつたからには此方に来るだろうから…いいよ、受けるよ」

『そうか、そうか…助かるぞ!!!終わったらお主金庫に1億送っておくぞ』

「ええ、ありがとうございますね…それじゃあね…」

そう言っただけはこの空間から出ていった…

『…本当にすまん…お主の望まん者を送って…せめて、ドライグを救ってやって来れ…』

くくくくくくくくく

「ッ!? (ゾクッ)」

「うん?どうした、御主人」

「あ、いや…何か面倒な事に巻き込まれた気がして…」

「そ、そうか…」

## うちの子達の成長日記

名前：兵藤 一誠

真名：???

種族：人間（仮）

性別：女性

年齢：10歳

容姿：Ibのイブ

説明：同年代よりも落ち着いていて少し大人びているが、大切な人や困ってる人の手助けをする優しい子。

だけど敵と認識した相手には冷徹に接し、潰しにかかる。

あと、朝は弱いもよう。料理の腕は有名なレストランに並ぶくらい高く、家事のこなせる。

能力：???

名前（人間時）：ハセヲ

名前（ドラゴン時）：???

種族：ドラゴン

容姿（人間時）：h a c / G . U . のハセヲ

容姿（ドラゴン時）：???

説明：主人である一誠を第一に考えて行動するが、意外と面倒見のいいお兄さんであり、ツッコミ役の一人でもある。

真龍と龍神は少し苦手と思っっているらしいが別に嫌いでは無いらしい。

料理はそこそこ出来、家事はかなり出来るもよう。朝食は朝に弱い一誠の代わりに料理をする。

能力：モルガナ八相&憑神

・第一相：死の恐怖 スケイス<攻撃特化の八相>

名前：ヴラド・スカーレット

種族：吸血龍

年齢：18歳くらい？

容姿：ピクシブでヴラド・スカーレットで検索♪検索♪

説明：この小説の作者であり、サポートキャラでもある。基本的には干渉を極力控え傍観している。（ようは抑止力である）

性格は誰にでも優しく基本丁寧語で喋るが：キレると相手に皆のトラウマになった攻撃などを繰り出す。

楽しい事が好きで悲劇を嫌う為そう言ったモノは見ない傾向がある。（上記の記述はドラマ嫌いと言うこと）

そして一誠たちの事を我が子の様に見守っている。

能力：作品干渉—作品内に干渉でき、他者の能力に干渉されない作者権限

：作品改編—作品内のイレギュラー等を修正、改編できる作者権限

：能力剥奪—転生者から能力を取り上げる能力

：八方美人—容姿・性別・年齢を自由に変えられる能力

名前：龍ヶ崎 神矢

性別：男子

年齢：10歳くらい

容姿：原作一誠の金髪赤目姿

説明：神様？によって転生された自称オリ主を名乗る：俗に言うは踏み台転生者である。性格は能力を使ってハーレムを作り、邪魔するやつは簡単に殺そうとするヤツ。能力の一つで赤い龍ドライブを無理矢理従えさせて禁手等を使用出来るようにしている。

能力：王の宝物庫—Fate／シリーズの英雄王ギルガメッシュの力（本来なら空であるがおまけで低レベル宝具が多数ある）

：赤龍帝の籠手—赤い龍ドライブの力を宿した神滅具、精神操作によって能力を無理矢理引き出され禁手可能

：ニコポ・ナデポ—：説明不要の下らない能力

：精神操作—精神を操る能力、神器にも干渉でき能力を無理矢理引き出すことができる能力

## 猫を狩る蝙蝠が触れた龍の逆鱗

それは…開けてはならないパンドラの匣…

”かの者”は何も望まず、何者にも囚われず、何事にも無心だった…

しかし”かの者”が動けば”かの者”の”僕”が全てを終わらせに来る…

”死の恐怖”に怯え、”惑乱の蜃気楼”に迷いこみ、”増殖”から逃れ、

”運命の預言者”より滅びを告げられ、”策謀家”に踊らされ、

”誘惑の恋人”に惑わされ、”復讐する者”に囚われる…

そして彼らは真なる”再誕”を望み、”黄昏の鍵”と共に常世より旅立つ

—黄昏の碑文より 「滅

びの預言」—

ハセヲside

今日はいつも散歩している場所ではなく、隣町まで遠出をしている。

たまには遠くのところに来るのもいいな…けど、

「しっかし…さつきから悪魔の魔力とかを感じるな…

アイツら勝手に土地を所有物にでもしてんのか?」

まるで監視されてるみたいに感じて気分が悪い…

ある程度見回ったら帰るか(ガサツ…うん?)

「今の音は…」

音が聞こえた方を向くと二人の猫の妖を三体の悪魔が追いかけていた

「…ハア…面倒なのを見つけたが…ほっとくわけには行かないか…」

そう言っただけ俺も後を追った…

???  
side

私の名は黒歌、今ははぐれ悪魔として扱われている者にや。  
今は妹の白音と共に追っ手から逃げているにや…

「白音、急ぐのにや!!!」

妹を守りながら逃げて来たけど、そろそろきついのにや…

「あうツ…」

「ツ!!白音、大丈夫かにや!?!」

「は、はい…大丈夫です…」

「そう…なら早く「おっと、そうはいかないぜ?ヒッヒッヒ」ツ!!!」

どうやら追っ手の悪魔たちに追いつかれ囲まれたらしい…

「どうするんだ?こっちは三人でてめえらは二人…いや、一人かww

w」

「大人しくしてりやく命までは取らねえくぜ?」

「もう鬼ごっここの時間は終わりだ!!」

「…万事休すね…」

「く、黒歌姉さま…」

「…せめて、白音だけでも逃げて(ボソツ」

「…え?」

私はそう言って悪魔達に立ち向かった…

白音…せめて、貴女だけでも幸せを見つけてなさい…

無論、疲れが溜まっていたから上手く戦えるわけもなく吹っ飛ばさ

れたけどね…

「黒歌姉さま!!!」

「白音…早く…遠くへ逃げなさい…」

「な、なら姉さまも一緒に!!!」

「いいから行きなさい!!!」

「ごちやごちやうるせえんだよ!!!」

悪魔の一人が巨大な魔力弾を撃ってきた、普段ならどうって事はな

いけど…

私は近くにいた白音を安全な場所に突き飛ばした…

「ツ!!!、黒歌姉さまツ!!!」

ああ…ゴメンね、白音…お姉ちゃんが守るって約束してたのにね…



魔力弾が迫ってきて、目を瞑った…しかし、いくら待っても魔力弾が来ない…

「あっ…」

「昼間つから悪魔を見るとはな」

目を開けると、そこには…白い髪の少年が立っていた…

ハセヲside

どうやら間に合ったみたいだ…

こんな幼い奴等に攻撃するとはな…

少しキレそうだ…

「なあ、てめえら…なんで攻撃したんだ?」

「て、てめえはなにもんだ!!!」

「おいおい…質問してんのは…こつちだぜ?」

少し覇気を放つと少し怯んだが一人が大声でこう言った

「そ、そこのやつらは”はぐれ悪魔”だから狩っていたんだよ!!」

「…へえ…で?」

—ソレガドウシタ?—

久々に…キレちまったぜ

黒歌side

「」「ツ!」「」

彼がそう言うと言と雰囲気がガラツと変わった…

何か触れてはならないモノに触れてしまったのだろうか…

「なら、てめえら…殺される覚悟はあるよな?」

「ああ!?人間やそのガキどもに俺たちが負けるかよw

てめえは一人でこつちは三人だ、数ではこつちが勝ってるぜえ?」

「ハッ、それがどうした?てめえらみたいな小物の三下に負けるかよ

…」

「な、なんだと!!!」

「野郎ぶつ殺してやらアアアアアア!!!」

「悪魔に逆らうもの死すべし!!!」

「…来いよ、死へ誘い…恐怖を駆り立てるもの…」

悪魔たちが叫ぶのと同時に彼も何かを詠唱をした…

「モルガナ八相の第一相…」 死の恐怖…スケイス!!!」

すると彼の声に応じた様に空間が割れ…中から” 紅い十字架を携えた白い巨人” が出てきた

悪魔たちも急に出てきた巨人に戸惑い動きを止めた…すると悪魔の一人が震えながらこう言った

「う、嘘…だろ…」

「おい、どうした!!」

「終わった…俺らは此処で終わるんだああああ!!!」

「落ち着けて!? どうしたんだ!!!」

「死の恐怖だ…俺たちは終わるんだ…」

「死の恐怖って…あ、い、いや、あれは伝説だろ!!!」

「フッフ…なあ、てめえら?…冥土の土産に教えてやるよ…俺のは—  
—」

すると彼の背中から巨大な黒い龍の翼が生えた

「我は終わりの創神龍皇ハロルド…創造と破壊を司る奈落の神龍皇だ!!」

そして白い巨人は十字架を構えた瞬間、悪魔たちを十字架に磔にして…消失させた

行きなりの出来事に私も白音も頭が追い付かない…

「…あ、お前ら大丈夫…な訳ないか…」

彼が話しかけてきたが…さっきの光景のせいで…身体が震えていた…

そして白い巨人が近づいてきた時に少し眠気が来て…倒れてしまった…

ハセヲside

あく…やっぱり気絶しちまったか…そして気絶して少ししたら両方共、

子猫の姿に戻った。

「…流石にずっとここにいと危険だな…まあ、ここら辺は少し見  
回ったしコイツら連れて帰るか」

そう言つて二匹の子猫を抱き抱えて空間を裂いて家に戻つた…

帰つたらまず傷の手当てだな…

## 友を守るために放たれる零閃

運命とはわからないもの…誰かを助けられることもあれば、誰かを殺すときもある

運命に縛られ続ける者もいれば、運命を壊す者もいる…

これは平行世界へと分岐する時であった…

一誠 s i d e

どうも私です…誰に挨拶してるんだろう？

今はハセヲが小猫たちを連れ帰って来てから早一週間が経ったくらいです。

小猫たちをそれぞれ白い方が白音で黒い方が黒歌と言い、現在は家で飼っています。

今はヴラドと一緒に家でお留守番しています。

私ですか？私は…

「おいご主人、そろそろ降りろバイクを停めてくる。」

「あ、わかった」

神社に住む姫島朱乃ちゃんと遊ぶ約束の為、隣町まで来ました。

朱乃ちゃんとは偶然会って仲良くなりました。

さて、今日はどんな遊びをしようか（助けてツ!!!）…な…

「おい…ご主人？どうかしたのか？」

「…呼んでる…」

「呼んでる？」

「行かないきや…」

「あ、おいご主人!!!」

ハセヲが何か言ってるけど急がないきや…

朱乃ちゃんが危ない気がする

しばらく走ると鳥居の近くに三人の男が朱乃ちゃんと朱乃ちゃんのお母さんに刀を向けていた…

コレハ…モウ…潰スノ確定ダネ？

朱乃side

…どうして?どうしてなの?

「貴様らは我ら一族の汚点だ…故に死んでもらう」  
なんで殺されなきゃいけないの?私はただ…普通に生きたいだけ  
なのに…

目の前のおじさん達は刀を構えていた。

「恨むなら…親を恨むのだな」

「ツ!?朱乃ツ!!!」

本殿の方からお母さんがこつちに向かつて走ってきた…

けど、おじさん達は私に刀を降り下ろした…

(あ…そういえば今日は一誠ちゃんが来るんだ…もう一度遊びた  
かった…

やっぱり死にたくない…死にたくないツ!!!)

—助けてツ!!!—

…いつまでたっても来ないので目を開けると——

「あ…」

そこのは指で刀を挟んで受け止めている友達一誠がいた…

一誠side

「…君ら…私の友達に何か用?」

三人の塵芥どもにだけ殺気を与えると怯み後ろに少し後退した。

「き、貴様こそ何者だ!!!」

私は指に挟んでいた刀を弾き飛ばした。

「私ですか?私はあなた方みたいな不審者とは違って彼女の友達です  
か?」

何か問題でもありますか?」

そう言う一人が笑いながら何かを言ってきた。

「ククク…なら良いことを教えてやる…その娘はな…」

「墮天使と人間のハーフって言いたいんですか?知ってますか?」…  
へ?」

「え…な、なんで?」

ここに居る全員が私の答えに驚いていた、そして朱乃ちゃんが質問してきた

…この塵芥どもを潰すついでに教えよう…

「そんなの…私が真龍グレートレッド以上の存在だからですか？」

「「「ツ!!!」」」」

そう言っ!て覇気を出すと大気が震えた。

…別の言い方でも良かったかも…あ、朱乃ちゃん達は驚いてるけど恐れているって目をしてなくて良かった…

塵芥どもは…顔真つ青にしながら刀が震えてる…

「…ねえ？」

「ヒツ!!な、なんだ!!」

「なんで彼女たちを狙ったのかな？」

「そ、そんなのそいつが…墮天使との娘だからに決まってるだろ!!」

「…それで？」

「だ、だから一族の汚点を消しに来たんだ!!」

…コイツら何いつてるの？墮天使との娘だから？一族の汚点だから？

…その程度で…

「…その程度で…彼女らの命を奪うの？」

私は殺意を塵芥どものみにつけて”ある刀”を構えた…

—シャキン—

その音が聞こえたときには…相手は命の灯火が消えていた…

三人称 side

—シャキン—

彼女が何処からか出した刀を構えた時にその様な音が全員の耳に聞こえた…

その瞬間、彼らの身体は切り刻まれていた…

「完成形変体刀”斬刀・鈍”なまくら居合い抜刀術”零閃編隊・十機”…と  
言っても聞いているわけないか…」

そう言った後、刀を仕舞いいつの間にか来たハセヲに死体処理を頼

んでいた

「ハセヲ、コイツらの後処理お願い」

「ハア……ご主人がやれば良いだろ？」

「私は朱野ちゃんと遊ぶから」

「…分かったよ…あ、あと今こつちに物凄いスピードで…」朱乃オオオオオオオ!!朱璃イイイイイイイ!!」

彼は魔力で死体を消してついでに境内を綺麗にしながら喋っている…

もうスピードで叫びながら黒い何かが飛んできた…朱乃ちゃんと遊びはもう少し後になりそう。

## 悪魔と堕天使と龍の異種族協定総会

作者 side

前回までのあらすじ

簡単に言おう…お前は最後に殺すと言ったな？

…あれは嘘だ、ベネット死亡…ok？

「いや、色々可笑的いにや／です」

あれ？こんな感じじゃない？

「全然違いますよ…」

「一誠に手も足も出なかった!!の方が分かりやすいにや」

あ、それもそうかw

さて…今回は題名通りです♪

白音、黒歌好きの皆様はもう少し待って下さいね？

では、始まり始まり♪

一誠 side

…なんだか紙芝居みたいに始まったような…

気のせいだよな？まあ、いいか…

どうも一誠です。今は朱乃ちゃんと遊びながら他の方々を待っています。

とりあえず簡単に説明すると…

1. 朱乃ちゃんのお父さんであるバラキエルから感謝された
2. お礼として私はアザゼルとついでに現魔王を呼んでもらいました
3. 来るのが遅くなるためその間、本来の目的の朱乃ちゃんと遊ぶ

↑現在此処

今はこんな所かな？

「一誠ちゃん、どうしたの？」

「うん？あ、ゴメン少し考え事してた」

「ふくん…一誠ちゃんって年のわりによく考え事してるよね？」

「…朱乃ちゃんもその年で普通その台詞って言わないよ？」



私に対して変なのって意味で言った台詞にツッコミを入れると驚かれた…なんで？

あ、ちなみハセヲは今バラキエルたちと喋ってます。

「しかし、あの娘は強いな」

「フツ、当たり前前だ…俺の認めたご主人だぜ？強くないわけ無いだろ？」

「ハハハツ、何処からその自信は湧いてくるんだ？」

「アザゼル達が着たら答えてやるよ…それまで内緒だ」

「あらあら、それは待ち遠しいですね…ねえ貴方♪」

「ああ、そうだな朱璃♪」

…ハセヲがヘルプ求めるようにこっちも見てくるけど…こっち向くな、

アザゼル達の到着まで我慢して…

…テンテンテテン♪by作者く

…今ポケモンセンターの音楽が聞こえた…気のせい？

「…ご主人、どうやら着たみたいだぞ？」

「あ…うん、わかった…それじゃ行こっか？」

「うん♪」

そう言つて朱乃ちゃんと手を繋いで向かった

どうやら私達以外はもう着席していたみたい

「…で、バラキエル…いったい何のようで呼んだ？」

家族は助けられたみたいだが…

彼が墮天使の総督のアザゼルか…ちよいワルオヤジっぽく見える

…

そして彼の後ろにいる銀髪の子…アルビオンの現所有者みたいだね。

「いや、彼女達が居なければ最悪の事態になっていた…

呼んだのは彼女たちからの頼み事だ」

「頼み事だと？」

「それはどんな事なのかな？」

次は紅髪の魔王サーゼクス・ルシファーがそう言った

…そろそろ喋ろうと思っていたが―

「それは俺から少し話そう」

喋ろうとしたらハセヲが話し始めた…

「君は？」

「俺はハセヲ…いや、ここは真名の”ハロルド”と名乗ろう」

「！！！！」

朱乃ちゃん以外は物凄く驚いてる…ハセヲってそんなに有名だったんだ

「ハ、ハロルドって…あの終わりの創神龍皇かッ!?」

「ああ、そうだ…さて、今回集まってもらったのは2つある…

一つは黒歌達のはぐれ解除だ」

「…理由を聞きたい」

サーゼクスは少し間を置いてそう聞いてきた…

何か思い当たる所があるのかな？

「アイツらは無理矢理悪魔にされた上、殺されかけた…

あまりにも理不尽だ、あと今は俺たちの家族だから手を出すなよ？」

「…ハセヲ…殺気を出しながら言うな…朱乃ちゃんとサーゼクスの後ろにいる娘が怖がっている」

そう言うどハセヲは殺気を抑えた

「…二つ目は私から言うね？」

「ああ…わかった」

そう言つてハセヲは少し下がった

「さて…二つ目は協定を結ぶことです」

「…協定だと？」

「おいおい嬢ちゃん、おじさん達をからかっているのか？」

…馬鹿にされてる…まあ、仕方がないか…

「おい、テメエら…ご主人を馬鹿にしてんのか？」

「…え？」

ハセヲが喧嘩腰に言ってる…仕方ないから私から言おう…

「ハア…一応言うけど、ハセヲは私の眷属だよ…」

「「なツ!?!」」

あ、バラキエル含めて三人とも驚いてる

「あと…ご主人は俺以上に強いしバラキエルの娘助けたのはご主人だぞ?」

「その件は本当ありがとう」

「いえいえ、当たり前前事をしただけです」

「と、とりあえず協定ってどんなのだ?」

やつと本題に戻った…

「とりあえず危害を加えてきたら潰します…あ、ちなみ天使側にも言っておいて下さい」

「OK…あとはあるかい?」

「後は、そうですね…私の地域近くで、はぐれが出たら狩りを手伝いますよ…」

相手によつては助けますが」

「ふむ…了解だ、その協定を結ぼう…しかし協定を結ぶなら少しは情報をくれないかな?」

少し間を置いたのはそういう理由ですか…

そうですね…これならいいかな?」

「そうですね…私の知り合いにグレートレッドとオフィスがいるとか?」

「「なツ!?!」」

おお…凄く驚いてる

「あ…いい、いやお前らの能力とかの情報の方だ」

アザゼルがすぐに対応して言ってきた…では、こっちなかな?」

「強さだけを教えると…私もハセヲもグレートレッド以上の存在ですよ?」

そう言ったらその場の空気が凍った…何で?

…その後、空気が戻った後はいつの間にか着たミカエルと何故かいるイリナを含めて

三大勢力ともつと他の事を含めて協定を結んだ…本当、いつ来たんだらう?」

???  
s i d e

フフフ：此処に来たかいがあつたぜ!!!

原作と色々違うが：まあいいか：

もう少し様子見してから俺のハーレム計画の第一歩を踏み出さず

!!!

愚者は生け贄となる、 覇邪神龍帝 再臨

ヴラド side

前回のアラスカ

「いや、あらすじです!!／＼にや!!」

そうですね♪

とりあえず一誠たちはちゃんと協定を結べたみたいだね…

けど、どんどん近づいている悪意にどう立ち向かうかな？

それじゃ、二人とも：Let's Go!!

「あ!!ちよつと待って!!」

一誠 side

どうも一誠です…いつも誰に挨拶しているんだろう？

あ、今の状況を言うかね…

「一誠ちゃんから離れてください!!」

「いや!!一誠は私と遊ぶの!!」

「一誠ちゃんは私の幼なじみだから私が先に遊ぶの!!」

…ハーフ墮天使と悪魔と幼なじみに取り合いをされています…

「…見てると和むな」

「ああ、全くだな」

「私もその意見に同意だ」

「あらあら♪」

「全員将来はいい女になるだろうな…」

「二うちのご主人／娘／妹に手を出したらただで済むと思うなよ

?」

「アツ、ハイ…(汗)」

「……(ジー)」

おい、その大人たち…和んで無いで助ける!!!

そしてさつきから此方を見ている白龍皇でもいいから助けて!!

「…とりあえず、遊ぶなら外で遊べよ?」

少し協定見直したいしな」

「あ、なら私も…」

「二一誠／＼一誠ちゃんは私と遊ぶの!!!」

「アツ、ハイ…(汗)」

なにこの娘達…コワイ…

ハセヲが襖を開けて境内に出ると…数多の”剣”が降ってきた  
「ツ!!!」

すぐに気づいたハセヲは全て魔力で消し飛ばした

「あれは…滅びの魔力!」

「ハア…どこの誰だか知らないが…出てこい!!!」

ハセヲはサーゼクスの発言を無視して草むらを見ていた。

すると草むらから金髪赤目の少年が気持ち悪い笑みを浮かべながら

草むらから出てきてこつちに近寄ってきた。

「…テメエ、誰だ?」

「それはこつちの台詞だ、貴様こそ誰だか知らねえが…

オリ主であるこの俺…龍ヶ崎神矢に楯突くのか?」

…コイツなに言ってるの?

「…頭可笑しいのか?オリ主って何だよ(笑)」

「なっ!?!馬鹿にしてるのか!?!」

ハセヲの態度にイラついてるみたいだけど…

ハセヲの反応が普通。

「ああ…で?何が目的だ?」

ハセヲがそう言ったら彼は不敵に笑いながらこう言った…

「目的?そんなの…ハーレムを作ることじゃ決まってるだろ?ハーハツ  
ハッハー!!!」

「…ハア…スゲく下らねえな…」

「フツ…貴様などすぐに倒してそつちにいる嫁たちを頂く!!」

「…嫁?」

すると私達に指を指してきた。

こつち見るな気持ち悪い…

「そつちにいる彼女たちの事だ」

「お前の嫁じゃないだろ…」

「いつかはそうなるのだ…そいつらは俺の物なのだからな!!!  
テメエは邪魔だからさっさと死ね!!」

…アイツ…今なんて言った?

「…今…なんて言った?」

「あ?…そのモブに死ねって言ったn——ツ!」

ああ…コイツ…殺ソウ

三人称side

龍ヶ崎は物凄い轟音と共に吹っ飛ばされた

「グハツ!?な、なんだ?!」

すると一誠の周りには赤黒い魔力を纏っていた…

そして…先程迄とは雰囲気ガラリと変わっていた。

「…あまりふざけたことを言わないでもらえませんか?」

「フ、フフフ…そっちこそ、あまり凶に乗るなよ?」

少し痛い目に遇わせないと…いけないみたいだな!!」

そう言つて龍ヶ崎の後ろに黄金の歪みから数多の剣が一誠に向かつて飛んでいった

「「ツ!」一誠／＼一誠ちゃん!!」

「……(スッ)」

朱乃達が叫んだ…しかし、一誠は手を前にかざして…

飛んできた剣を魔力で飲み込み”全て”消滅させた

「な、なに!」

「脆い剣…こんな剣で倒せるとでも?」

「な、なめるな!!ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手!!」

すると龍ヶ崎は歪みを消して左手に赤い籠手を出した

「あ、あれはブーステッド・ギア赤龍帝の籠手!」

「まさか彼が現赤龍帝…」

「……」

「…あれを赤龍帝と呼んでいいのか?」

アザゼル達が驚いてるとハセヲがそう言った

「どう意味だい?」

「いやなに、あの籠手から感じるドライブの波長が…どんどん弱まっ  
ているんだ」

「なにッ!？」

〈それは本当か!!!〉

ハセヲの台詞に白龍皇が反応した

「ああ…ご主人!!そしつ早めに潰してくれ!!ただし命は取るな!!」

「うん…わかった…」

「ごちやごちやうるせえ!!バランスブレイク 禁 手!!」

すると龍ヶ崎が赤い龍のような鎧を身に纏った…

『フーステッド・ギア・ステイルメイル 赤 龍 帝 の 鎧!!』

「…ハア…面倒ですね…」

『落ちろオオオオオオオ!!』

龍ヶ崎は数回倍加してから一誠に近づき殴ろうとした…が

指一本で受け止められた

『な、なんでだ!?!』

「うるさい…落ちろ…」

そう言つて龍ヶ崎の拳を掴み、地面に叩きつけた…龍ヶ崎は少し地  
面にめり込んだ

『ゴハッ!!?ゲホ…ゲホ…テ、テメエ…』

龍ヶ崎は地面から這い上がるが鎧の隙間から血を流していた

『俺は…俺はオリ主だ!!こんなところで負けるわけが…無いんだ  
よオオオオオオ!!』

「愚かですね…全くわかっていない…」

龍ヶ崎の拳は一誠届かずに”破裂した”

『は?…ギヤアアアアアアア!!』

龍ヶ崎は破裂した痛みでのたうちまわっていた。

「その程度の痛みすら耐えれないのなら…貴方はその程度の人間…い  
え、愚者よ…終わらせる…」

すると一誠の影が大きくなり龍ヶ崎を拘束した。

龍ヶ崎は抵抗しようとしたが腕の痛みが残っていた為、何も出来な  
い。



『は、H A ☆ N A ☆ S E ☆ !!』

「そう言われて話す人なんていませんよ…私は全にして一、一にして全…」

故に誰でもあり、誰でもない…全ての影は我が領域…

我は二創龍の石柱…我が名はティール…」

『あ、ああ…ああああああ!!!』

禍々しい魔方陣が展開されたのを見て恐怖心が混み上がってきたようだ…

勿論、彼女が逃すわけがない。

「貴方の死因はたった一つ…たった一つのシンプルなもの…貴方は私の前で命を安易に扱った…」

沈みなさい…アビスフオール…イレイザー…」

龍ヶ崎の下に展開された魔方陣から禍々しい光が上に展開された魔方陣に向かって放たれ…

龍ヶ崎は飲み込まれた…

「愚者を裁くために再臨…我、覇邪神龍帝なり…」

その時の彼女の影は巨大な龍の姿をしていた…

激震!!赤き龍の帝王!!!

く前回のカステラく

「だからあらすじです／にや!!!」

作者より踏み台終了をお知らせいたします…

この後以降はこいつ出ないかもw

「…逆に出す予定もあると?」

まあねく♪

ようは私の気分とさじ加減さ♪

「…出来れば二度と現れないことを願います…」

まあ…とりあえず踏み台1号は今回で終了ですねw

それではどぞ!!!

テューオside

「…ア、アハハ…」

…虚しいね…ただの脅し文句に反応って…

ああ…昔の事のせいかな?あの時は本当に…悔しかった…

誰かを救えたかも知れない…助けられたかもしれない…

けど…駄目だった…救えなかった…命の重みを知った…知った筈

なのに…

逆に私が奪おうとした…

「私…私…」

「もう…苦しまなくても良いんだよ?」

「…ヴラド…」

そこには家にいるはずのヴラド達がいた…

「君は思い詰めすぎだ…命の重みを知った…」

けど彼はそれを知らなかった上に他の命を奪おうとした…

命なんて救える範囲がある…だから救える命だけはしっかり救い

なよ?」

「…うん」

彼女は私の頭を撫でながら目を見て笑顔でそう言ってきた…

まるで心を見透かしたような感じだけど…それでも心に響いた。

だから私は彼女の問いにしっかりと答えた。

「よろしい!!さてと…」

すると彼女は私を白音達の方に行かせて、あの少年の所に向かった…

ヴラド side

「やあ、気分はどうだい？愚かな転生者君？」

私は一誠…いや、ティーオに満身創痍で済まされたの踏み台に話しかけた。

彼は此方を睨んでいた。

「て、てめえは…誰、だ…」

「私かい？私は監視者さ…君ら転生者のね？」

「監視者、だ？そんなヤツ…がなん、のよう…だ？」

「いや…君がルールを破った上にうちの子達に手を出したから…消しに来たんだわw」

「…はあ？」

私はそう言つて彼に右手をかざした…すると、彼の中から光の球が複数出てきた。

「な、何をしたんだ!？」

「そう焦るなつて…ただ奪つただけだから」

「う、奪つたつて…何をだよ!!!」

「え？決まつてるじゃないか♪…君の能力だよ」

「…え？」

私がそう言つた後、彼の顔は真っ青になつていった…

「な、なにしてんだよ!?!そんなことしたら俺が主人公になれないだろ!?!」

「いいんじゃない？元々、君に主人公素質なんて無かつたんだし…」

ドライブを縛り付けてる様な奴に主人公なんて務まらんよ?」

「あ…アアアアアア!!!」

すると彼は神器を出して殴りかかってきた…が、

ティーオをがいきなり間に入って、拳を受け止め術式を打ち込んだ。

テューオside

「…そろそろドライブを離してもらおうよ」

そう言って私は打ち込んだ術式を発動した。

発動した術式によって彼は空中に縛り付けられた。

「な、なんだ!？」

「術式解放…コード<666>」

展開された術式は彼の目の前に魔方陣が展開され…

私はその魔方陣の中に手を突っ込むと彼は苦痛の叫びをあげているが…

無視してドライブの力を探して…少ししてやっと見つけ、魔方陣から

赤い宝玉取り出して術式を解除した。

「ゲホッ…ゲホッ…ゲホッ…」

「ふう…やっと見つけた…」

「…き、さま、は…何、も、のだ?」

すると赤い宝玉から声がした。

「初めましてかな…私は一誠…それかテューオでもいいよ？」

「一誠、か…オ、レは…ドライブ…だ…」

弱っている中でも意地があるのか、律儀なのか…

名をしつかりと名乗る赤龍帝ドライブ。

「ドライブ!?!おい、ドライブしつかりしろ!?!」

すると白龍皇が話しかけていた。

「アル…ビオンか?…まさか…こんな風な時が…来るとはな…」

「貴様、こんな終わり方だけはやめろ!!!」

「まだ決着が着いていないだろ!!!」

「ハハハ…確かに…そう…だな…ハア…ハア…」

「かなり容態は悪いようだ…早くしないと…」

「ハロルド!!!」

「もうできてる…おい、赤龍帝」

「なん…だ?」

「貴様は…まだ生きたいか?」

へフツ…愚問だな…アルビオン…との戦い…に…

決着…を着け…ていない…しな…それに…

「それに？」

へそこの子娘に…恩を…返して…いない…しな…

「…そうか…なら喜べ」

そう言ったハロルドは術式をドライグの宝玉を中心に展開し…

肉体を形成し始めた…

肉体はハロルドくらいの背に紅髪で翡翠色の瞳をした少年が造られていった。

少ししたら服も一緒に形成されていた。

「どうだ？気分とかは」

「…ああ…さつきまでの痛みとかが嘘みたいが無い」

その肉体に宿ったドライグは先程までとは違い…若い少年の様な声であった。

「当たり前だ、肉体錬成と同時に、うちのご主人がお前を治癒してたんだからな？」

「成る程…悪いな、助かった…」

「気にしなくてもいいよ、すぎでしたことだから…さて」

私は魔方阵を彼の上に展開して水を少し流した。

「ゴボボボボツ?!?ゲホツ!!!ゲホツ!!!」

「あ、目が覚めた」

「普通の水？いつそ一思いに塩酸でも良かったんじゃない？」

「塩酸は朱野ちゃんたちの迷惑になるか…」

「まあ、それもそつかく」

「おい、無視すんな!!!」

私とヴラドが喋っていると彼が話しかけてきた。

「…なにっ？」

「よくもいろいろとやってくれたなツ!!!お前らマジでぶっ殺してツ!!!」

『それはこっちの台詞だ』…へ？」

声が出た方を向くと…ドライグが赤龍帝の鎧を纏っていた。

「な、なん…で？」

『よくも俺の力を好き勝手使ってくれたなあ…覚悟はいいか？』  
<Boost!!!>

籠手から高らかと音声が届き響く…そして彼は元宿主の胸ぐらを掴み…上に投げた。

「あ…うわああああああ!!!」

『龍の逆鱗に触れたことを後悔しろ…インフェルノブラスター!!!!』

<Boost!!!Boost!!!Boost!!!>

彼は右手に倍加した力を溜め…上空に圧縮したエネルギーを解き放ち。

元宿主を消滅させた…。

## 第零章く平穏日常のイレギュラーく うちの子達の成長日記 ver. 2

名前：兵藤 一誠

真名：ティーオ

二つ名：覇邪神龍帝くジ・エンドオブ・ゼロ・イモータリテイドラ  
ゴンく

種族：人間（仮）

性別：女性

誕生日：1 / 18

年齢：10歳（序章）↓15歳（一章）

容姿：Ibのイブ

説明：同年代よりも落ち着いていて少し大人びているが、大切な人や困ってる人の手助けをする優しい子。（その為男女問わずモテる）  
だけど敵と認識した相手には冷徹に接し、潰しにかかる。

あと、朝は弱いもよう。料理の腕は有名なレストランに並ぶくらい高く、家事のこなせる。容姿や行動等が相まって保護欲を無意識に周りに与えていたりもする…。

説明：本来の彼女は多次元を渡る強力なドラゴン”二創龍”と言われる存在である。過去に対となる存在との戦いによりこの世界へと舞い降りた。

その時に友と呼べる存在が出来たが三大勢力の争いによって死に、怒りのままに暴走をして三大勢力＋他種族を含めた星ひとつを相手に戦った。

結果は対となる存在との戦いの傷が癒えていなかった為、大半の種族を吸収してから聖書の神を筆頭にトップクラス達によって封印された：しかし封印は途中で目覚めた理性が傷を癒す為の時間を取るために敢えて受け、癒えた後は変わり身を置いて別の存在へと成り変わって今に至る。

現在は他の種族を滅ぼそうとも思っていないが命を軽く見ている

者には特に容赦なく、戦争を起こそうとする者には鉄拳制裁。

彼女には本来の姿と言うものがない：理由は彼女の原初が”影”である為。

対をなす存在の名は凜外天龍王エイザス。

<能力>

・百鬼夜行：ありとあらゆるモノに変身でき、性質、能力をコピーでき、人数を増やすこともできる。

・魑魅魍魎：他の魔力や妖力等を操る&使い魔を生み出す能力。（最低レベルは上級悪魔を軽く捻り潰せるレベル）

更に武具なども生み出す事も可能。（ただし武具の場合は一度に”4つ”までしか出せない）

・一望千里：近くの内容に関する情報を得ることが出来る。（例：能力関連、読心）ただし自身より上の存在に関しては情報が少ししか得られない。

・因果応報：全種族に対して絶対的有利に立つことが出来る、更に相手の攻撃を吸収、相殺、反射可能。（尚この能力は暴走時は絶対的有利の効果は発動しない）

・怨徹骨髓：全種族の精神を統べ、全ての影を操れる、精神と陰を統べる彼女を代表する力。彼女と対峙した相手の精神を蝕んでいき、影による防御、攻撃、拘束等も可能。また精神を癒すことも出来るが、その場合は肉体的な痛みを伴い、逆に肉体を癒す時は精神的な痛みを伴う。

名前（人間時）：ハセヲ

名前（ドラゴン時）：ハロルド

二つ名：終わりの創神龍皇<ジ・フォールレイション・アビスドラゴン>

種族：ドラゴン

容姿（人間時）：h a c / G . U . のハセヲ

容姿（ドラゴン時）：???

説明：主人である一誠を第一に考えて行動するが、意外と面倒見の



いいお兄さんであり、ツツコミ役の一人でもある。真龍と龍神は少し苦手と思っているらしいが別に嫌いでは無いらしい。料理はそこそこ出来、家事はかなり出来るもよう。朝食は朝に弱い一誠の代わりに料理をする。

説明：正体は世界最古にした最強の神龍であった。他種族に対して元々興味が無かった為、自身の空間を作り中で眠っていた。眠りを妨げられないように意味深き事を言い関わりを断った。

それからティーオが来るまで眠りについていたため、昼寝が趣味である。別次元にいる始まりの滅神龍帝と対をなす存在である。

<能力>

・無限創造：ありとあらゆるモノを産み出す事が出来る彼を象徴する能力。

・モルガナ八相&憑神

・第一相：死の恐怖 スケイス<攻撃特化の八相>

・第二相：<>

・第三相：<>

・第四相：<>

・第五相：<>

・第六相：<>

・第七相：<>

・第八相：<>

・終末捕食：全ての力を吸収し、自身の力へ変換する能力。（ただし自身より上の力は吸収できない）

名前：ヴラド・スカーレット

種族：吸血龍

誕生日：1 / 18

年齢：18歳くらい？（年齢不詳）

容姿：ピクシブでヴラド・スカーレットで検索♪検索♪

説明：この小説の作者であり、サポートキャラでもある。

基本的には干渉を極力控え傍観している。（ようは抑止力である）性格は誰にでも優しく基本丁寧語で喋るがキレると相手のトラウ

マになった攻撃などを繰り返す。楽しい事が好きで悲劇を嫌う為そう言ったモノは苦手傾向がある。そしてティーオ達の事を我が子の様に見守っている。

<能力>

限  
・作品干渉—作品内に干渉でき、他者の能力に干渉されない作者権

・作品改編—作品内のイレギュラー等を修正、改編できる作者権限

・能力剥奪—転生者から能力を取り上げる能力

・八方美人—容姿・性別・年齢を自由に変えられる能力

・悪夢開眼：相手のトラウマを具現化して攻撃する能力

・一殺多生：生物一体をイケニエに行う儀式を行い他の生物を生み出す事が出来る。(ただし儀式内容はグロイ)

追加能力

・王の宝物庫：龍ヶ崎 神矢から没収した能力、中には何も無いた

め

現在はヴラドの倉庫兼工房として使っている。

名前：ドライグ

二つ名：赤龍帝、赤い龍<ウエルシュ・ドラゴン>

種族：ドラゴン

容姿：(人間時) 赤髪緑眼の原作一誠 (人間時は原作一誠の声)

(ドラゴン&禁手時) 原作通り (原作通りのドライグの声)

説明：二天龍の片割れのドラゴンで赤龍帝と呼ばれている。幾度となく白龍皇と戦っており、ドライグの方が能力的に少し負け越している。

性格としては少し大雑把で戦いを好むが相手の事を考えて行動する事も多く：まるで父親の様に見える。(うちのドライグの場合)

今世の宿主から救ってくれた一誠やハセヲには恩義を感じており、大半の命令やお願いは従っている、特に一誠には少し甘くなっている。まっすぐにいるところもある。

一誠のお蔭で生前の能力の<透過>を使用出来るようになってくる。よく来る白龍皇を追い払う役をしている。



## チョコの甘さは幸せの味

これは…ティーオの中学二年のバレンタインのこと…  
ティーオside

「…ハア…」

あ、どうも一誠もといティーオです。…やっぱり誰に挨拶してるんだろう？

ちなみに何故ため息を吐いたかというと…

「…まさか、二年になってすぐに生徒会長にされて鬱だったのに…こんなに貰うとは…(汗)」

目の前には山のように積み上がった大量のチョコ…

ちなみに今は放課後の生徒会室に居ます。

「…ハア…ため息についても仕方ないか…とりあえず食べよつと…(ハム)」

チョコ自体は嫌いではないが多すぎ…小学生の頃から年々増えるチョコ…

表示気しんどい…

「ケーキにクツキーに彫刻のようなチョコ…凝りすぎ…しかも女子生徒…(汗)」

何故、女性が女性にバレンタインに贈るの？

まあ…中には男性からの物まである…バレンタインってよくわかんない…

そう考えてると誰かがやって来た。

「「お嬢／師匠、こんにちh…ってうおッ!!!」」

「おお…今年も凄いわね〜(笑)」

「ティーオは今年もいっぱい貰ったね〜♪」

「メアリー、学校内では一誠でしょ？しかし…本当、いっぱい貰ったわね〜…」

入って来たのは同じ生徒会メンバーの庶務の松田、会計の元浜、会長補佐の夜空、

書記の桐生、副会長補佐のメアリー副会長のギャリー先輩、

彼等の事はまた今度教えるとして…

「そつちもそれなりに貰ってるでしょ?」

「いやいや…会長の場合は異常でしょ?」

「師匠…今年も凄い数ですね…大丈夫ですか?」

「私の心配するくらいなら、そこで崩れている二人をどうにかして」

私は夜空と桐生と話している時に崩れていった松田と元浜に視線を向けて言った。

多分今年も貰えなかったのだろう…

「お嬢が人気なのは分かってはいるけど…」

「ああ…やっぱりさっきの会話でチョコ貰ってない俺らに取っては…」

「ああ…チョコ欲しい…」

やはり二人はチョコを欲しがっている…そんなもの

普通に売ってるだろうに…

「あ、アハハハ…(汗)」

「チョコ貰えなかつたくらいで情けないわね」

まあ、私は会長がチョコをエロく食べてる所を見れたら大満足だし」

あとの二人は少し呆れていた、桐生に関してはノーコメントにしておこう。

「私はもう全部食べた!!!」

「アンタ確か数十個貰って無かつたっけ?」

「お昼をかわりに抜いた!!!」

「お昼に全部食べたの!?!ってか食べきつたの!?!」

メアリーとギャリー先輩は何故か漫才してる…いや、いつもの事か。

「さて、そろそろ本題を言うね?」

「あ、はい」

「それで、今日はどんな要件かしら?」

「もつとリラックスしても構いませんよ?今日は個人的な要件なので…」

そう言った後に皆を一行に並ばせ、目を瞑らせて両手を前に出させた：

全員がその体制になったのを確認して”あるもの”を皆の両手に置いていった。

「あ、もう目を開けてもいいよ」

「うん？師匠、これって…」

「いつもの労いを込めて私の手作りクッキーだよ…」

チョコは他に上げる相手がいるから駄目だけどね」

私の手作りと言った時に全員喜んでいたけど…松田、元浜、桐生は特に喜んでいたね。

松田と元浜は泣いて喜んで、桐生に関しては頬を赤らめ息を荒くしながら喜んでた…桐生はよくわからない。

「さて、要件は以上…私は少し用事で先に帰るから戸締まりお願いね？」

「あ、はい!!任せてください!!」

「あそこの三バカは任せなさい」

「またあとでね〜♪」

そう言ってギャリー先輩達にあとの事を頼んで私は先に帰った。

〜会長帰宅中（途中ヤンキー複数人粛清しながら）〜

「ただいま〜」

「うん？あ、おつかえり〜♪今日は速かったね〜」

「まあね…あ、それと…」

そう言って鞆からハート型のチョコを手渡しした。

「ほえ？」

「ひ、日頃の感謝を込めて…その…あ、上げる／＼／＼」

ヴラドはポケーとしてるけど…こっちは恥ずかしくて顔が熱い。

「…フッフ、それならありがたく貰っておくね♪」

そう言ってちゃんと受け取ってくれたようだ…やっぱりこう言うのは少し恥ずかしい…

その後は白音達にもちゃんと上げて寝ました。

あ、ちなみに本命チョコはヴラドに送ってもらいました。

ヴラド side

…どうやら寝たみたいだね？さて、いろいろとしなきゃいけない事が多きけど…

とりあえず皆様に謝罪をしておきますね？

第1章は都合によりちよつとした日常回にいたします。

理由としては中の人自体が上手く纏めれなくて止まってしまった為です。

誠にすみません…お詫びとして作中でティーオが私にチョコを渡すシーンを描いてみたので

今回はこれ勘弁してください!!!

## 踏み台狩りし道化師

ヴラド side

今日も1日が終わりティーオ達が帰ってきた。  
彼女らが就寝した後が：私の時間だ。

「さあ〜て：今日も穏便には終われそうに無いな〜」

私はそう言いながら外へと出掛け：

家の近くにいる愚かな踏み台君の反応がする方へと向かった：

踏み台 side

クツ：まさかこんな予想外なことが：

あ、我はこの世界のオリ主の鳴神 龍偽だ!!!

しかし：この世界の一誠がまさか：まさか：超絶美人の完璧超人  
とは：

しかも人当たりも良い!!!

だが、この世界の主人公は我だ!!つまり奴は我の嫁!!我の物だ!!!

そんな訳で現在奴の家の付近で待機中だ。

「眠りに就いたのを確認したら、襲って我だけしか見れない様にして  
やろう：グフフ」

少し妄想していると、奴の家から誰か出てきた：と思っていたらいき  
なり消えた。

驚いて周りを見渡すと：

「ねえ？そこで何をしているのかな？」

すると上から片言の様な不気味な声が聞こえた。

声の方向を見上げると：黄色い布の様な物を纏った者が立っ  
た：空中に

ヴラド side

「だ、誰だテメエ!？」

：私を見て驚いたのか大声で叫ぶけど：

さつきまでスニーキングしてたんじゃないの？



そしてやっぱり結界張つといて良かった…こんな大声じゃご近所迷惑だ。

「…ああ、貴様もしや踏み台だな？ならば…死ねい!!!」

そう言つて彼は能力を使つてきたけど…王の宝物庫人気だね、  
金で装飾された剣や斧、槍、戟等々…

前のバカよりは少し強いけど…所詮微々たるもの。

「な、何故当たらない!？」

彼は物凄く驚いてるけど…正直隙間が有りすぎて避けやすい。

コイツ…武器のランクが高いかわりに出せる数が少ないね…六個の空間しか開けてないし。

…そろそろこつちも攻撃に転じ様かな？

「ツ!!其処だ!!」

動きが止まった所に攻撃か…良い判断だね…でも、

それは相手の動きを見てからじゃないと無駄になる…

私はゴーストドライバーを出して、其処に白い眼魂を入れた。

「…おいで」

<アイ♪バツチリミナー♪ハツ!!バツチリミナー♪ハツ!!>

ゴーストドライバーから出てきた白いパーカーゴーストによつて

宝具は全て叩き落とされたことにまた驚いていた。

そして白いパーカーゴーストは彼に突進して吹き飛ばした。

「なツ!?!グボアツ!?!」

そしてレバーを引いて押した。

「…変身」

<カイガン!!ガイスト!!レッツゴー!!覚悟!!操りゴースト!!>

掛け声と音声と共に白いパーカーゴースト…ガイスト魂を羽織つた。

…そして…

『…さあ…ココからガ…ショーの開演ですよ?』

久方ぶりのショータイムですネ♪

ソノ分、楽しませてくださいネ?

三人称 s i d e



それを察し、彼女もさすがに面倒になってきた為、新たに紅い眼魂を取り出し、スイッチを押した。

『さて…そろそろ面倒になってきたのでサツサと終わらせますネ?』

＼カイガン!!ユキムラ!!戟塵舞う・大阪の塵!!／

ドライバーの眼魂を変え、ドライバーから新たに紅いパーカーゴーストが現れ、

その身に纏った…。

「姿が変わった所で!!!」

彼は全く同じ行動しかしてこなかった…

すると彼女はパーカーの肩から下がっている槍の持ち手を伸ばし、飛んできた刃を”全て”落としながら彼の方へと走り始めた。

「ハア!!?な、なんで…なんで!!なんで!!なんで!!なんで!!なんで!!なんで!!なんで!!!」

射っても射っても全て落とし尚も走ってくる…

そしてあと少しの時、彼女はドライバーのレバーを操作した。

『…くたばれ』

＼ダイカイガン!!ユキムラ・オメガドライブ!!／

音声と共に槍の先端が紅く染まり…彼に向かって二本の槍による乱舞を喰らわした。

『さあ…地獄を楽しんできな?』

攻撃を喰らった彼は叫ぶ間もなく肉片へとかわり…この世から消滅した。

その後、彼女は変身を解除し結界を解除して空間を元に戻してから家へと戻った。

## 全てを奪われ失った異形の復讐者

—テメエ何か消えちまえよ!!!—

「…俺が…」

—テメエの居場所なんか何処にもないんだよ!!!—

「…俺が何を…」

—お前なんか、居なければよかったんだ!!!—

「俺が…何をしたって言うんだ…」

空は薄暗く…冷たい雨が大地に…そして俺に降り注ぐ…

少し肌寒い時期の為、どんどん身体から熱が抜けていき…

目が霞み、身体がうまく動かなくなっていく、涙が溢れてきた…

そして確信した…俺は此処で死ぬのだと…

身体から様々なモノが抜けていった…

家族も…友達も…存在も…”相棒”も…

何もかもどんどん持っていかれ…

最後に残ったのは…ただの抜け殻であり元○■△◆だった者だ…

身体感覚もどんどん無くなっていく…

だが唯一残っていたモノがあった…それは俺から全てを奪って

いった奴への復讐心だけだ!!

「ま…だ…ま…だ…まだ、死ねない!!!この憎しみを晴らすまでは…まだ

!!!死ねない!!!」

「だっただ、どうやって戦うんだい?」

するといつの間にか俺の前に現れたヤツが問いかけてきた

誰だか知らない…いや、そもそも顔を上げる力も無いのだからわか

らなくて当然か…

それでも俺は答えた

「例え、この命を引き換えにしても倒す!!!何がなんでも倒す!!ただ

…それだけだ!!!」

言い終えた俺はまた気を失いそうになっていたが…突然ヤツは笑

い出した

「アハハ!!いい答えだ!!気迫もよし!!!決意もよし!!!流石、”元”——

——だ!!

その覚悟に敬意を表し…君を我が臣下として”第二の生”を与えよう…

新たな名と力を与えるね♪」

そういつてヤツは…俺を淡い光に包んでいく…

そして俺の気を失った…

…気を失う瞬間、ヤツの声が聞こえた…

「これから君が破滅を行うのか？救済を行うのか？それを見させてもらうよ♪」

そして身体が浮き始めて初めてヤツの顔を見たとき…

ヤツはまるでそこに居ないのに存在している不可思議な者に見える…そして同時に奴はもしかして死神なのでは？…そう考えてすぐに気を失った…

ヴラド side

「アハハハ!!!いや〜まつさか居るとはね〜♪」

偶然とはいえ見つけた事に驚いたけど…見つけた時は嬉しくそして彼は面白いね…

まさか彼があんな風になってしまったとは驚いた。

とりあえず彼の力だったドライブは今は別の存在としている…

「…うん？…となると今の彼の力とは？」

ふとした疑問を考え彼の深層心理を覗きこんだとき…何者かの眼光をみた

それは間違いなくこの世界には”存在していなかった”者だ…

本来存在しないモノがこの子を生かすために宿っている…

平穏を望むと同時に破壊を望むモノが…

「これはこれは…この子の未来が楽しみだね〜♪」

出会いはいつもハプニング!?

???  
s i e d

何処からか眩しい光を感じ目を覚ました。

「グッ……こは……」

目を開き辺りを見回すと……何処かの豪邸のような広々とした洋風の部屋だった、

……どうやら俺はあの後、アイツによって此処へ連れてこられ寝かされていたようだ……。

そう思考を巡らせていると真正面の扉が開き、誰かが入ってきた。

「あ、気がついたみたいだね」

中に入ってきたのは黒髪ロングの少女だった。

一見普通の少女なのだが……本能的にこの少女に恐怖を抱いていた。それをわかったかの様に少女は少しの力を抜いた状態で話しかけてきた。

「そう警戒しなくても……ってヴラドに強制的に連れてこられたんだから警戒もするか……」

まあ、とりあえずまずは自己紹介でもして落ち着こうか」

少女は優しく話しかけてきたので警戒をしつつ名を名乗ろうとした……したのだが……

「オレの名は……名は……」

俺は自身の名前を言い出せなかった……いや、言葉が出なかった……

まるで自分の中から”名前”と言うものが抜き取られたかの様に何も言えなかった……

「……その様子だと今の君の存在の証明は残った身体と魂……そして君に宿っている彼ら”だけみたいだね……」

「ーッ!?おーッ!!何か知っているのか!?!知っていryグオ!?!(ドシン!!)」

少女の一言に俺はまだ気怠い身体を無理矢理動かして少女から聞き出そうと近づいた……筈だったが……

身体が上手く動かさずベッドから転落した。

そして顔を上げると…近くにいた少女のスカートの中を見てしまった…

「あ…わ、悪い!!偶然とは言え…その…見てしまつてすまない!!!」  
すぐさま離れて謝罪をした。

するとポカーンとした顔をしていたかと思うと急にクスクスと少女が笑い出した。

「感情が乏しい人かと思ったけどそうでも無いみたいだね…別に見られて困ること無いから良いよ、

あとわざとでも無いみたいだし」

「あ、ああ…すまない、わかつてもらえて助かる」

そういつて俺はベッドへ腰かけて少女を見据えると少女はコホンッと咳払いをしてから自己紹介を始めた。

「さて、とりあえず改めて私の名前は兵藤 一誠、こう見えてもうすぐ高校生だからね?」

「…えッ!？」

「あ、うんその反応知つてた…わかつていても悲しいモノだよ…」

少女…いや、一誠は片手で頭を押さえながら少し悲しげな顔をしていた。

「なんか…悪いな…勘違いとは言え…中1かと思つてた…」

「いいよ…いつも通りだから…あ、あと此処の家主は私だつてこと言うの忘れるところだった」

一誠はテヘツ☆つてして言ったのだった…いや可愛いけど違う、そうじゃない!？」

今重要なのは…

「えッ!?家主なのか!？」

「あ、うん、家主つていうか此処の住人全員を治めている者です」

「住人を治めているつて…何かの組織だったりするのかよ…」

「うん、そうだよ」

…拝啓、俺を産んでくれた両親へ…

どうやらあなた方の息子は物凄い方々に拾われたようだ…

俺はそう思いながら頭を押さえて顔を伏せていた…

## 屋敷に住まう不思議な住人

???  
side

あのあと色々話した後、俺は彼女：一誠から服を渡され彼女は一階へ先に降りていき、

俺は着替え終えた後に一階へ降りていくと：

「わあ…」

そこは先程までいた寝室と比べられない位に広く、暖かみのある空間が広がっていた：

ここは本当に屋内なのだろうかと思った：何か違和感を感じた。

「あ、やつと降りてきたのかい？」

すると奥の方から一誠が此方へとやって来た。

：そうだ、彼女はこの館の主なのだからこの空間の違和感について知っているかもしれない、

そう考え彼女に訊ねてみた。

「なあ、聞いてもいいか？」

「うん？何かな、私に分かる事ならある程度答えて上げよう。」

「じゃあ…この空間に感じる違和感…って言うのか？そんなのを感じるんだが…何か知らないか？」

そう言い終えた後、一誠は何故か少し驚いた後、少し考えた後話し始めました。

「そうだね…まずそれについては私の”家族”を紹介してからね」

そう言つて一誠が手を鳴らすと：突然彼女の後ろの空間が裂けて中から誰かが出てきた。

俺と同じ年くらいな男女が4人と一誠と同じくらいの子金髪少女が一人に紫色の髪の子ケメンが一人、

俺を此処へ連れてきたヤツとその後ろに同じ顔をした人が四人：

うん？四人？…

「同じ顔が四人とかこわッ!」

「貴方：キャラ崩壊してますよ…作者の設定を見たやつからすると…」



「いや、師匠：メタ発言はどうかと：：つてか二人とも本題へ戻って下さい」

「はーい」

少年少女本題再確認中

「さて：では紹介致しますね？こちらが私の家族です」

彼女がそう言いながら後ろの方々については紹介し始めた。

「まずは彼から、彼の名前は時永 夜空です。」

すると黒髪のイケメンが前に出てきて挨拶をしはじめた。

「初めましてだな、さつき師匠が紹介したように俺の名は時永 夜空だ!!」

能力は仮面舞台・永久と仮面舞台・骸骨だ、よろしくな!!」

そう言つて彼は手を出してきたので少し戸惑いながら握手をした。

「あ、ああ：宜しくな」

「おう!!」

「次に彼らは右から松田 心也と元浜 王牙だ」

次は元氣ハツラツの少年とインテリ系なメガネの少年たちが前に出てきた。

「オッス!!お嬢から紹介された松田 心也だ!!能力は仮面舞台・心臓と仮面舞台・玄走だ!!」

「同じくお嬢から紹介された元浜 王牙だ。能力は仮面舞台・帝王と仮面舞台・呪騎だ、宜しく」

二人が拳をつき出して来たのでこっちも拳をつき出してコンツとぶつけ合った。

「これから宜しくな」

「おう!!」

「次紹介するよー、彼女の名は桐生 美月だ」

次に目の前に来たのはメガネをかけた少女だった。

「ハア～イ♪」誠ちゃんから紹介された桐生 美月よ♪能力は仮面舞台・暴帝と仮面舞台・女皇よ、宜しく♪」

そう言いながら顔を近づけてきた。美人ではあるが、こうも近寄られると逆に不気味だ：（汗）

「ち、近い…顔が近い（引き）」

「美月、引かれてるからさつきと下がって、他の子達も紹介しないと行けないから」

「ハア〜イ、一誠ちゃん了解で〜す♪」

一誠の一言で何とか助かった…とりあえずアイツは色んな意味で危険と認識した…

「ゴメンね？うちの子が…」

「いや、別にいいさ…それより次の紹介あるだろ？」

「あ、そうだね（コホン…それじゃ、次は…どつちがいい？）」

「あ、それならあたし「ハイハイハイ!!次は私がいい!!」…アンタ、せめて言葉を被せるの止めて…orz」

どうやら次に紹介される奴で話し合いしてたようだが紫髪の青年が崩れて金髪の少女がジャンプしていた…な、何があつたんだ？

「それじゃ、メアリー自己紹介よろしく」

「ハイハイイ!!はじめまして!!私、メアリー・スカーレット!!能力はマスクドライド・ソーサラー マスクドライド・ワイズマン 仮面舞台・魔導と仮面舞台・魔術だよ♪よろしくー!!!」

そしてハイタッチを求められたので確り答えた…物凄く激しい娘だな…（汗）

「あ、ああ…よ、よろしく（汗）」

「うん、テンション低いけど、まあいいか!!!」

そして直ぐに一誠の元へと戻って行った

すると紫髪のイケメンが近づいてきた。

「悪いわね、あの子いつもあんなテンションだからなるべく早くなれることをオススメするわ。」

私はギャラー・スカーレットよ。能力はマスクドライド・コーカサス 仮面舞台・金光とマスクドライド・ダークカブト 仮面舞台・黒光よ、宜しくね」

「あ…ああ…よ、よろしく（汗）」

ま、まさかのオネエ口調?!イケメン+オネエ口調とか何?!カオスな組み合わせだぞ!?

なんだこんー組み合わせ?!カオス?はいよる混沌か何かなのか!?

「とりあえず落ち着こうか?確かに驚くかもしれないけどギャラーは

オネエ口調なだけのノーマルさんだよ♪」

「そ、そうなのか？とりあえず落ち着いた（汗）」

「よし、落ち着いたところで自己紹介をしよう!!!私の名はヴラド・スカーレット!!」

この館「妖冥館」の管理人で此処にいる子達の保護者をしてるよ  
♪

能力は作者特権と仮面舞踏会だよ♪よつろしく☆  
THE・クリエイター マスカレイドイリユージョン

とりあえず握手したが一言…何かイラツ時きた。

まあ、殴るのは止めて残りのメンバーの自己紹介を聞こう。

「さて、次はゆうや達だよ」

するとトマトみたいな色の奴が何かいい始めた。

「あ、マスター、俺達の詳しい紹介はまだ今度でいいと思います。

少し面倒ですし（グウー…ユーゴがお腹空かしてますし（汗）」

「そうだね、じゃあ名前だけ言ってそのあと朝食にしようか」

「ヨッシャ!!俺はユーゴだヨロシクな!!!」

まず最初に名乗ったのはバナナ髪のライダースーツをきた少年だ。

「次は俺か、俺はユートだよろしく頼む」

次に名乗ったのは茄子のような髪黒いコートをきた少年だ。

「次は僕だね？僕はユーリ、宜しく」

その次に名乗ったのは紫キャベツみたいな髪紫色の貴族服みたいなのを着た少年だ。

「そして俺がゆうやです、宜しくね♪」

そして最後に名乗ったのはトマトみたいな髪少年だ。

とりあえず一番気になることを聞くか。

「ああ、宜しく、ところで気になってたんだがお前らって四つ子か？」

その問いに答えたのはユートだった。

「まあ、そんな所だな…そう考えると俺が長男でユーリが次男、ユーゴが三男で…」

「ゆうやは末っ子だな!!」

「意義なし」

「意義あり!!末っ子ってのはいいけど…何で四男って言わないかった

の!?!」

「「え? ゆうやって女の子じゃ…」」

「ちくがくうく!!!」

…何か見えてほっこりするな…

とりあえず残りの奴等とも話をしないとな。

「おくい、四人とも? そろそろ朝食にするから戻ってきて」

「「あ、すみません」」

一誠の一声でゆうや達は直ぐに一誠の元へ戻った。

「さて、朝食しよつか…つと、その前に今は此処に居ないけど後一人ハセヲって子がいるから今度紹介するね?」

「あ、はい、分かりました」

そして俺を含めた全員で朝食を摂ったが…無茶苦茶旨くて涙がでた。

あとその時に新しい名前を貰った。

「名前は…兵藤 世戒だ。」

## 友達

世戒 side

「さて…そろそろ君にも能力を与えようかな？」

突然朝食を食い終わった後にヴラドがそう言い出した。

「能力を…与えるだと？」

俺は疑問に思った…いや、朝食の時にこの世界の裏側の天使や悪魔の事や神器についての事は聞いたから一応能力とかは聞いても問題ないが…与える？…って事に疑問を持った。すると一誠が俺の疑問に気付いたのか話に加わってきた。

「ああ、ヴラドや私は他者に力を与えることが出来るんだ…あと私とハセヲとゆうや達以外の六人はヴラドから能力を与えられたんだよ」「えっ!？」

俺は驚いた…と言うかヴラドってふざけてる印象しか内のにそんなに凄かったんだ…

「…で？君にはどんな力を与えようかって話♪」

「そうだな…」

無論、俺は急に言われても思い付くわけもなく何も思い付かなかった。

く少年散歩なうく

俺は結局何も思い浮かばなかったので少し外に出て散歩をすることにした。

外から見た見た妖冥館はわりと他の家より大きいだけでわりと普通にあるような家だった

しばらく歩いてると…

「わっふッ!？」

突然目も前に階段から落ちそうになっていた少女がいたので落ちないように咄嗟に

走って手をつかんでこちら側に引き寄せた

「おい、大丈夫か？」

「え？え？…あ、ありがとうございます」

どうやら突然の事だった様で少女は混乱していたが確り感謝の言葉を言ってきた…礼儀正しいな

「まあ、大丈夫ならいいが…もう転ぶなよ？じゃあな」

そう言っつてその場を去ろうとしたんだが…彼女は俺の服を掴んだのでその場を去れなかった…

「…おい、何故掴んでる(汗)」

「あ、えつと…こ、転げそうになったときに助けてくださったので…その…お、御礼がしたくて…／＼／＼」

「そ、そうか…別に御礼なんて気にしなくても良いんだが…」

「わ、私が気にするんです!!助けられたら御礼をしなきゃ気がすまない質なんです!!／＼／＼」

いや…そこで照れられても…ハア…面倒だが仕方ないか…

「あく…わかった…ならその好意に甘えることにする…」

「わ〜い!!へ(≡▽≡へ)♪」

何故か喜び始めたが…それより今言葉だけの筈なのに顔文字が見えたような…き、気のせいだよな?…そうだ!!きつと気のせいだ!!

「どうかしましたか?」

「あ、いや気にするな、何でもない、ただの考え事だ」

俺がそう言っつて誤魔化すと彼女は少し笑いだした

「フフ…貴方は少し変わった方ですね♪」

まあ、天气が良かったからか日差しに照らされてとても綺麗に見えた…

「…笑うと綺麗だな…(ボソツ)」

「ふえ?なんですか?」

「いや何でもない…ただの独り言だ」

俺はまた誤魔化した…流石にさっきのは聞かれてたら恥ずかしい…

「そうですか…あ、そう言えば」

すると、そう言っつて彼女は俺の目の前に立ち止まった。

「そう言えばお名前をお聞きするの忘れていました」

「ああ…そう言えば俺も聞き忘れていた…俺の名は世戒…ただの世戒

だ」

「世戒さんですね？私の名前はシオンと申します」

これが…俺の初めての友との出会いであり…初めて喪失に対する意味を知る事になった話だ…